勇者or巫女姫...？どっちも嫌です。

鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者or巫女姫…？どっちも嫌です。

【コード】

N4182Q

【作者名】

鳴

【あらすじ】

篁 たかむすね 爽香 すわか 16歳。に明日なるはずでした。片思いをしている省吾さんを落とすため日々奮闘しているものの敵も然るものひっかくもの。頑固で融通の利かない性格なのでなかなか上手くいきません。

そんな省吾さん攻略のために何かいいイベントはないかな？と確かに考えましたが、何故いきなり異世界トリップ&勇者か巫女姫かと役割を振られなければならないのでしょうか？

当然どちらもお断りです。私は省吾さんとらぶらぶしながら元の世界に戻るんですっ！

有言実行・チート的万能少女が堅物彼氏を落とすまでの奮闘物語（？）

逆ハーですが、ヒロイン省吾さん以外はあうと・おぶ・眼中です。それほどまでに邪険にされてもめげない美形たちや反則的行動満載の篁家のメンバーが織り成すコメディファンタジー。（多分。予定では）

思い切りご都合主義の上、主人公とその後家族様は「ありえねえ！」ってほど最強集団です。ご注意ください。

序章（前書き）

初めまして。勢いと思いつきだけで書き始めてしまいました。
一応最後まで書ききれないように頑張りたいと思います。

しかし、ヒロインが最初に生まれたのは作者高校生の時なのでXX
年前です。

今更日の目を見ることがあるとは予想だにしませんでした…（苦笑）
少しでも楽しんでいただければ幸いです。

序章

「この国を救う勇者となるか、この国を守る巫女姫となるか、好きなほうを選べ」

「謹んでどちらもお断りさせていただきます。では失礼」

そう言っただけ私は目の前に立つやたらときらびやかな衣装を着けた青年にくるりと背を向けた。

「や…！ちょ、ま！それはないだろう！選ばれし「伝説の人」よ！」
レジェンド

なんか背後であわあわと追いかけてくる青年の気配（+お付の人）の気配がするけど取り合えず揉め事の二オイもするし、関わりたくないのでスルーの方向で。

3つ上の双子の兄の片割れも言っていた。

「揉め事の二オイがしたら取り合えずスルー。何があってもスルー！誰がなんと言っでもスルーしておけ」と。

スポーツ万能・眉目秀丽・野生本能の塊な兄の言うことは正しい。

もう一人の双子の片割れも言っていたな！。

「面倒ごとに関わりたくないならとりあえず笑顔で断れ。何を言われても笑顔のまま断れ。誰が何を言っけてきても作り物の笑顔のままできっぱり断れ」と。

頭脳明晰・眉目秀丽・腹黒満載な兄の言うことも正しい。

6つ上の長兄も言っていたし。

「嫌なことは嫌と言いなさい。爽香ひやかがそういうなら誰にも無理強い

はさせないから」

温和・濃厚・外柔内剛の兄も正しいのだ。

さらに両親もこう言っていた。

「爽香の意思を一方的に無視して、人権を尊重できない奴がいたら、そんな奴は薙ぎ倒しなさい。叩き倒して無視していいからねっ！お
かーさんが許しますっ！」

「うちの可愛い娘に無理を強いるような不届きな奴がいたら、おと
ーさんが三枚におろした上になますに刻んでやるから是非連れて来
るんだよ？」

子煩悩な両親の教えに従い地上に向かうやたらと長い通路にワラワ
ラ出てくる（多分）兵士たちを薙ぎ倒して私はようやく地上へと出
る。

そこで私が見たものは。

「なんですか、これは……………？」

一面に広がる真っ白な「雲海」だった。

序章（後書き）

いきなりヒロインの名前すらまともに出てきませんでした（苦笑）
口が悪いのは内心と家族間だけ。表向きは非常に大人しい巨大な餌
代のかからない猫を飼っているためとても丁寧な口調です（笑）

第一章 篁（たかむら）さん家（ち）のお嬢さん

「それじゃお母さん行ってくるねー。帰りは八角のおじさまの所に寄ってくるから。遅くなるようならちゃん和省吾しやごさんに送ってきてもらうね」

「あら、今日八角さんと省吾さんの所によるの？頼まれてたカリン酒が出来たから持って行ってもらおうと思ったのに」

そう言っただけカリン酒の入った一升瓶を片手に母が玄関まで出てきたが、流石に私も肩をすくめる。

「…いくらなんでもこれから登校しようとする娘にそれは持たせないよね…？」

ちよっと疑いの目で見た私に母がかんらんかと豪快に笑った。

「いくらなんでもそれはないわよー。仮に持っていかせるならわからないように水筒に持たせるって！」

「……………」

やりかねない。この母ならやりかねない。

過去、必要とあればどんな手段を使っただも目的を達成して来た人であるからして、思わずサイドバッグに入れた水筒の中身を確認してしまったのは仕方ないだろう。

「だって夜には省吾さん来るんでしょ？その時に渡すから大丈夫よー。あ、でもこれは先に持って行ってー」

そう言つて母に渡されたのは瓶詰めされた果物らしきもの。

「この前、八角さんに頼まれてたのよ。千早ばあちゃんお手製の桃蜜漬け。この前おすそ分けしたらはまったらしくて、千早ばあちゃんに直接頼み込んだらしいわよー」

八角のおじさまってば…確かに千早おばあちゃんの果物漬けは美味しいけどわざわざ岡山まで行って頼んでたのか…。まあ、そこまで楽しみにしているなら持つていくしかないよね？

ちなみに八角のおじさまというのは実際に血のつながりのある伯父ではない。

八角財閥という財閥の会長様らしいのだが、3年前にちょっとした事件に巻き込まれて知り合つて以来の親友(?)なのだ。

まあ、おじさまからしてみると孫みたいなものなんだろうケド。

省吾さんというのは八角のおじさまのボディガード。

そして私が猛アタックしている意中の男性である！

省吾さんはちょっと複雑な生い立ちをしていて、子供のころは施設にいたそうだ。

その省吾さんを引き取り、息子同然に育てたのが八角のおじさま。大学卒業後、おじさまの関連会社に入社すると思われていたが、今まで育ててもらつた恩を一番身近で返したいと大学時代にアメリカでSPの訓練を受けていまじゃおじさまの秘書補佐兼主任ボディガードとなった。

そんな八角のおじさまは息子同然に信頼しているボディガードの省吾さんに孫同然の私が猛アタックしているのを見て「いけいけごーごー！」とばかりに旗を振つて応援してくれているし、うちの家族も最初は渋い顔をしていたが今は公認してくれている。

後は本人を落とすのみ。…なのだが、如何せん省吾さんは非常に堅物で融通の利かない人だった。

うーん、この際一つなにかドッキリなイベントでも起こらないかな…
そう、例えば二人して異世界トリップしちゃうような！

……なに馬鹿なこと考えてるんだろう私。そんなことあるわけないよね。

頭に浮かんだ妄想をふるふるっとぶって消すと改めて学校に行くため玄関を出ようとした。

「あー、さーや待って!!」

呼び止められて振り返れば階段を下りてくる三の兄の顔が見えた。

「おはよう、せいちゃん。なんか急ぎの用？」

3つ上の兄、晴明せいめいは双子でうちにはもう一人同じ顔の孔明けいめいという兄も居る。

さらに言うなら6つ上にも兄、亮りやうがいる。

……名前の由来は、まあ、言わずとしれたところなのだが両親曰く

「明るく爽やかな名前を付けてあげたかったのよ！ 私たちもそうだしねっ」

とのことだ。

(ちなみに母は晴季せいせい父は光輝こうきという)

そんな訳で簗さんちの家族はやたらとキラキラしいイメージの名前

がついているのであった。

「これ、ようやく仕上がったから持っていきなよ」

そう言って渡されたのは緑色の石のついた小さな指輪だった。

「さーやの誕生石のエメラルドを嵌め込んだのである。お守り代わりにね」

徹夜したらしい兄の目元には端正な顔に似合わないクマがうつすらと浮かんでいる。

指輪のデザインもかなり精密なものだし本当に嬉しい。

「一日早いけど、誕生日プレゼント。亮兄さんやコウのやつも何か気合入れて準備してるみたいだから楽しみにしてやって」

そう言って後半苦笑いしたところを見るとこーちゃんが何を準備してくれているのかがいささか不安になるよ…。

りょうちゃんは一番の常識人だから多分、一番普通のプレゼントを用意していると思うんだけど…ね。

「ありがとうせーちゃん！大事にするね。っと、まっずい、バスに遅れちゃうー！それじゃいつてきまーす」

篁 爽香、16歳まであと一日。

いつもとそう変わらない日の始まりだと思った。

だけど、それはトンデモ世界へと続く日々の始まりでもあったのかもしれない。

第一章 篁（たかむら）さん家（ち）のお嬢さん（後書き）

兄弟の名前は亮と孔明が三国志で有名な諸葛亮より。亮は「明るい」孔明は「はなはだ明るし」という意味です。（確か）

清明は平安時代の陰陽師 安倍 あへのせいめい 清明より。読んで字のごとく「晴れて明るい」という意味で使っています。

紅一点、末っ子で今作品のヒロイン爽香ちゃんは「爽やかに風薫る季節に生まれたから」という言っことで「爽やかに香る」という名前になりました。

お約束すぎる異世界への入り口

土曜日の午後の秋葉原。 やっぱりそれなりに混んでいる。

今じゃ秋葉原といえは「萌えの聖地」だの「ヲタク街」だの言われ
て外国人観光客も一杯来る「世界のAKIBA」になってしまつて
いるけど、私にとってはやっぱり基本は「電気街」である。

この街で世間を震撼させた大事件が起きたのはまだ記憶に新しいし、
歩行者天国だつてまだ完全に復活したわけじゃない。
ホコデン

私もライトノベルや漫画も大好き。 いわゆるBLだつて萌えだつた
んでもどんとこい。

ただ、私の通つてる高校は小中高と一貫のいわゆるミッション系お
嬢様学校だつたりするわけで。

こんなある意味柄の悪い(?)場所に純粹培養のお嬢様たちを連れ
て遊びに来ることはできない。

連れて来たりしたら写真撮られたり色々めんどくさそうなことが起
こりそうだしね。

そんな私の連れは省吾さんである。

学校帰り、八角のおじさまの指示で迎えに来てくれたのだが、私が
買い物があると言ってここに寄つて貰つたのだ。

ちなみに省吾さんの見た目は長身で鍛えた体にフィットした黒のス
ーツにサングラスというパツと見には思わず近寄りたくない雰囲気
だ。

まあ、いわゆるヤのつく職業に見えるというか…。

その中身は照れ屋で女性が苦手な動物が好きな優しい男性なのだが
そこは私だけの秘密にしておきたいところだ。

まあ、そんな訳で一応お嬢様学校の制服を着ている私が怪しげな輩に絡まれることはまずない。

「お嬢…まだ探し物は見つからないのですか…？」

「んー、ちよつと待つてくださいね。…えーと、これと、あれと、それと…あ、おじさんその棚の上のコイルも一巻きお願いします」「はいよー。いつもひいきにしてもらってありがとよー。…うん？なんだい今更鉱石ラジオでもつくろうつて言うのかい？それならキットもあるからそつちの方が安上がりだよ？」

馴染みの電気屋さん個人商店だが非常に丁寧にいい商品を扱っている。

大型店みたいな派手さはないけれど初心者さんも常連さんも関係ない懇切丁寧な接客が気に入っているのだ。

子供のころから家族に連れられてこの店に出入りしている私はご店主さんとも既に顔なじみで仮に用が無くてもこの店の近くを通ると顔を出して挨拶するぐらいだ。

「ううん、今回はキットを使わないでちゃんと作ろうと思って。お父さんがこれに使えるそうな質のいい石を送ってきてくれたのでそれを使って作ってみようかなと思ったの。すすめてくれたのにごめんなさい」

そう言ってちよつと頭を下げるとおじさんはここにこ笑いながら軽く手を振る。

「そついつことなら構わないよ。それじゃ全部で3000円になるけど、爽香ちゃんはお得意様だからね。特別にこのキットと同価格でいいよ」「

そう言つて先に示してくれた鉱石キットと同じ値段を提示してくれる。

「そんな、悪いです！ちゃんと支払いますつてば！」

「いやいや、実は爽香ちゃんに頼みもあるからその依頼料も含めてつて事でさ」

おじさんはちよつと人の悪い笑みを浮かべるとごしよごしよと耳打ちをする。

「……………了解です。おじさん。ではその依頼料を価格から引いたらこのキット代になったということだ」

おじさんの頼みに思わず苦笑しながら代金を払うと省吾さんと一緒にお店を出る。

「……………お嬢。先ほどの依頼というのは…？」

もともと口数の少ない省吾さんがわざわざ聞いてくるほどには私は浮かれていたのだろう。

別にお小遣いに不自由しているわけではないけれど、趣味の一つに節約・儉約・貯金というのがあるので過程はどうあれ安く買ひ物が出来たのは純粹に嬉しい。

「ああ、今度せーちゃんとこーちゃんの二人を店に連れて来て欲しいつて。おじさん、お兄ちゃんたちの新しい発想を貰つて趣味のラジオを更に改良したいらしいの」

電気屋のおじさんも悪い人ではないのだが、一回趣味の世界に入ると周りが暴走して見えなくなるちよつとはた迷惑な性格をしている。双子の兄たちはそのおじさんと結構気が合うのかたまに会うとあれ

やこれやと意見交換して面白がって変わったラジオを作っていたりするのだ。

ちなみにこのラジオ会議(?)が始まると寝食を忘れるどころか兄たちが泊り込んで帰ってこなくなるので心配性の長兄はあまりいい顔をしないのだ。

それをなだめて上手く数日泊り込めるように計らうのがおじさんの依頼の正確な内容だったりする。

「そうですね。お嬢に直接何かあるわけではないのなら良いです」

そういつてほんの少しだけほっとした表情を見せる省吾さんを見て私も笑う。

だけど、そんなほのぼのした空気を突然の甲高いブレーキ音が破った。

え?とおもって振り返ると何かにスリップしたのか一台の車がスピンしながら私たちのいる橋の方へ吹っ飛んでくる。

「お嬢!危ないです!こちらへっ…!」

慌てて逃げ惑う人たちが私をかばうように抱き寄せた省吾さんが更に橋の中ほどへ移動する。

しかし、橋の反対側からも何があったのかと見物に来た野次馬と逃げてきた人たちの群れに挟まって。

二人揃って橋から押し出されてしまった。

うん。丁度タイミングが悪かったんだと思う。

こういうときに限って橋の欄干がちょっと壊れてて仮止めの補修柵になっていたとか、省吾さんの足元に小さい子供が居て、その子が押されないようにと私をかばった不自然なままの体勢で省吾さんが必死でバランスを取っていたとか。

まあ、色々なタイミングが重なってうっかりと川に向かって落下してしまったのだが、水に落ちた衝撃で私はあっさりと気を失ってしまっただけです。

おかしいなあ？水泳の授業では高飛び込みだって平気でクリアできるし、バンジージャンプだって黄色い歓声を上げながら楽しめる私が、いくら不意の出来事だったとはいえさほどの高さのない橋から落ちて気絶するはず無いんだけどな。

そして次に気がついた私の目の前にいたのはどこからどう見ても外国人コスプレイヤーさんたちだった。

お約束すぎる異世界への入り口（後書き）

落下、異世界トリップは王道だと思います。

怪しいコスプレ集団は揉め事の二オイ

「……………」
「……………」

目の前にいるコスプレイヤーさんは薄い金の髪に青い瞳に白い肌。北欧系なのかな？あまり日焼けしなさそうな肌をしている。

身に着けているものは白地に金系銀系の縫い取りがしてあるけど余り派手な印象は無い。どちらかというところかなり地味な感じだ。

ローブといった感じの足元まである長衣の腰辺りを薄紫の幅広布で巻いて体型に合わせているらしい。

こんな服装が出てくる話なんてあつたかなあ…？

とぼんやり考えていたら右手の方から足音が聞こえた。

ん？足音？というか、ここどこ？省吾さんは？

はっと我に返って周囲を見渡せば周囲はどう見ても秋葉原の町並みではない。

それどころか、どうみても自然石で作られた洞窟の中である。

洞窟の中にもかかわらず、空気は清浄で籠もった感じや嫌なガスは全く感じられない。

また自分の背後に光源があるのかぼんやりと周囲の様子を見て取れる程度には明るい。

そして目の前には何故か私に向かって跪いた金髪コスプレイヤー、
s。

私は立ち上がると自分の服装や持ち物をまず確認する。
とても、とてもいやな予感がするのでまず自分の持ち物を確認し
たかったのだ。

着ているのは朝家を出たときと変わらない学校の制服（セーラー服）
。持ち物は肩からもかけられるリセバッグとさっき買ったラジオ部
品やお弁当箱などが入った小ぶりのスポーツバッグ。
こっそり確認したポケットの中には朝三せーちゃんの兄からもらった小さな指
輪も間違いないが入っている。

となると足りないのはただ一つ。省吾さんだけだ。

カツン、カツン、カツン…

足音がすぐ近くで止まる。

私はなるべく表情を殺して無表情を装いながら足音の主を見る。

『わー、お約束のような美形登場ですよー』

内面で棒読みのまま感心した声を上げてしまいがまあ、仕方ない。
目の前に立っていたのはそれこそこのファンタジーに出てくるよ
うな王子様ですか？と訊きたくなるような典型的美青年だったのだ。

「この国を救う勇者となるか、この国を守る巫女姫となるか、好き
なほうを選べ」

「謹んでどちらもお断りさせていただきます。では失礼」

銀髪に紫の瞳とか言う日本ではありえない組み合わせのうえ、黒の軍服っぽいデザインを着た美形の第一声に私は打てば響くような速度でお答えさせていただいた。

嫌な予感が的中している気がひしひしとするが、私にはやることがある。

省吾さんと早く合流してさっさとこんな怪しいコスプレ集団とおさらばするのだ。

そう考えてくるりと身を返すと既に見つけてあった上へ続く階段を上り始める。

「や…！ちょ、ま！それはないだろう！選ばれし「伝説の人」よ！」
レジェンド

うっわ、なにそのネーミングセンスの欠片もないような呼び方。生まれてこの方そんな怪しい存在になったことはないのだから

ず。
内心で毒づきながら階段を上っていると途中の踊り場にどこから出てきたのかワラワラと軽装の胸当てなどをつけた人々が出てきた。

「お待ちください、「伝説の人」よ！我が王…ゲフツ」

なんかいいかけた人がいたけどとりあえず当身一発で落としてみた。伊達に合気道やら空手やら剣道やらテコンドーやらの格闘技を10年以上習ってるわけじゃありません。

やたらと過保護で私の身の回りに異常なほど気を使う家族が万がー
のために習得させた各種格闘技（一部母親仕込）がこんなときに役
に立つとは。皆ありがとう。

背後からはひしひしと面倒ごとを抱えています。っていう雰囲気ウツクシの王
様だか王子様だかがお供を連れて追いかけてくるけど、家族の教え
に従って面倒ウツクシごとはスルーします。

邪魔者は丁重ウツクシにどいていただいて私は地上につながるであろう大き
な扉を押し開けた。

そこで私が見たものは。

「なんですか、これは……………?」

一面に広がる真っ白な「雲海」でした。

怪しいコスプレ集団は揉め事のニオイ（後書き）

ようやく序章につながりました。
次からがいよいよ本番です。

雲の上の世界は甘くない？

てつきり地上につながっているんだと思っていた扉の向こうに広がっていたのは普通、飛行機にでも乗らないとお目にかかれないうようなきれいな雲海でした。

その美しさに一瞬足を止めて見惚れてしまったものの、背後からは王子様（？）らしき人の声が追ってくる。

このままここでボケーっとしてたら追いつかれるのは目に見えているのでさっさと逃げなければいけないのだが、どうにもこうにも行き止まりで先が無い。

扉から顔を出して下を覗けば雲をすかして遙か彼方に小さく建物が見える。

……えーと、実はここの雲は足場がしっかりしてて歩けるんですーとかいうようなファンタジーなオチだとうれしいけど、違ったりしたら地上（？）まで真っ逆さですか。

この高さで落ちたら間違いないくらい叩きつかって残念な感じになって即死だね

などと思わず脳内にその姿を想像しそうになって大慌てでかき消したのはしょうがないよね。（ちなみに脳内映像にモザイクがかかっていたのは言うまでもない）

と、とりあえず何かを雲の上に落として足場があるかどうか考えよう！

そう思ってゴソゴソバッグの中を探したところ、お昼の時に友人から貰った100%のオレンジジュースの缶が出てきた。

ちょうどいいのでそのジュースに先ほど秋葉で仕入れたコイルを巻きつけ1Mほど線を延ばす。

これで万が一落とした缶が雲をすり抜けたとしても下までは落ちないだろう。

かなりの高さのあるこの場所から中身入りの缶ジュースを落として、万が一地上にいる人に当たったりしたらそれこそヤバすぎる！
若い身空で殺人者になんてなりたくないですからねっ！

そんな訳でササッと作った錘を雲の上にぼんと放り投げると、
見事に貫通してくれました(涙)

あー…やっぱりそううまく話はないかー。

がっかりしながら銅線を手繰り寄せてジュースをバッグにしまったところで背後にゼーはーゼーはー息切れた人が到着したようだった。

「ま、まで、と、いったの、に、(ゼーはーゼーはー)ひとつのはなし、も、き…け…」
バタリ。

あ、王子様（？）が酸欠起こして倒れた。
うーん、更にお付の人はもう少し下のほうを上ってきてるみたいだし、今のうちに見捨てて一つ前の踊り場から横道に逃げちゃおうかなー。

などとチラリと非道な思いもよぎったのだが、流石にちょっとかわいそうに思えてきた。

実は、この場所って最初に居た洞窟から見るとそこそこの距離昇ったところなんだよね。

わかりやすく言えば東京　ワーの大展望台まで昇ったぐらいかな？あつちは子供でも15分ぐらいで昇りきれらしいけど、ここは高度のせいかちよつと酸素が薄いような気がしなくもない。

まあ、私は二の兄こーちゃんの趣味に付き合っただレッキングとかもやるから多少の高度差は全く問題ないんだけどね。

洞窟内で最初に会った金髪のコスプレイヤーさんたちはどうみてもインドア派というか、あまり体を鍛えてなさそうだったから、私を追いかけて急いで昇ってくるのは相当辛いだろう。

でも、この王子様（？）って着てる服からすると軍服系？つまり体も多少鍛えてあるはずんだけど何でへばってるんだらう？

こんなことでへばってるようじゃ戦えないぞーとか思いつつ、倒れた王子様（？）のほっぺたをつんつんとつついてみる。

つつかれた方はなにやらうーんうーんと暫く唸っていたが、いきなり目を開けるとがばつと体を起こして私の手をしっかりと握り締め

た。

「やっと捕まえたぞ！」「伝説の人」！^{レジェンド}」

「……………」

上半身を起こした王子様（？）の顔が丁度私の目の前に高さにあるので思わずマジマジと見てしまうが、うん、見た目だけならほんつと……に、美人だ。この人。

さらさらの銀の髪は天使の輪が出来そうなつやつやキューティクル。その髪は背の半ばまであるだろうか？首の後ろで細いひもで括って一本に束ねている。

切れ長の瞳は紫水晶。あー、やっぱり瞳も銀色なのか。日本じゃ見られない組み合わせだから本当に珍しい。

目鼻立ちもスッキリしているけど、決して甘いだけじゃない雰囲気がある。多分、事務方も行動力もそれなりにありそうだ。

ただ、一つ言わせて貰えば。

この人、「ヘタレ」の二オイがする。

以前、お父さんの友人（日系アメリカ人）に会ったことがあるのだが、その人も凄くハンサムでかなりモテモテだったのに幼馴染の女の子に片思いして二十うん年言い出せないまま幼馴染の尻に敷かれまくっていたという話を聞かされたことがあるのだ。（それも本人から）

まあ、結果的にそのお友達は初恋を宥らせて幼馴染の彼女と無事ゴールインできたのだが未だに奥さんの尻に敷かれているそうだ。

この王子様（？）からはそのお友達とよく似た空気を感じるのだ。つまり、異性にはかなり押しが弱くて、気がつくと流されやすい。という雰囲気だ。

「……「伝説の人」？」

「……そんな怪しいものになった覚えはないと申し上げたはずですが？そもそも、人を一方的に呼び出しておきながら、一切の説明もされないままそちらの都合を押し付けるといっものは一国の指導者としては如何なものなのでしょうか？」

にっこり笑顔で私はさりげなく言うが、当然目は全く笑っていない。一歩間違えれば慇懃無礼と聞こえなくも無い口調に込めたのは

「勝手に呼びつけておいて説明の一つもなしとはどういっ了見なのかな？ふざけないで欲しいなっ（怒）」

という脅しに他ならなかったりする。

私の言葉になにやら顔色を変えた王子様はちよつと後ずさるとなげ
か正座をしてしまった。

「そ、それは…確かにこちらが無礼だった。申し訳ない。だが、こ
ちらにも事情があったわけで」

「まあ、そうですね。自らの身分も明かさずになにやら重大そう
な役目を押し付けようとなさるぐらいですから」

ホホホとちよつと口元を手で隠しながら睨むとさらに縮こまった気
がする…のは気のせいじゃないだろう。

「私はアレックス・ジリ・エフェノール。このエフェノリア国第一
王位継承者だ。」レシエント「伝説の人」よ、名前を教えるはもらえないだろう
か？」

「たかむらさき 篁 爽香。高校一年です」

「タカ…ム、ラサ…ヤカ？」

「変なところで切らないで下さい。呼びにくければサヤで結構です
ので」

「そ、そうか。ではサヤ、改めて頼みたい。わが国を救う勇者にな
るか、わが国を守る巫女姫となるか、どちらかを選んで欲しい」

「どちらもお断りいたします」

相変わらず即答で答えた私に対してアレックス王子が絶句した。

雲の上の世界は甘くない？（後書き）

アレックス王子撃沈（笑）　　というか相変わらず説明ナシなんです
ね、この人。

流石王子様、物事の頼み方を知らないようです（苦笑）

ヘタレ王子なりの事情

私の答えにぼーぜんときをあげたまま固まってしまったアレックス王子だが、そんなに口あけるとゴミが入るか、よだれが垂れそうな気がしてならないんですが…って、あ。本当にヤバイ。

口の端から一瞬光るものが見えた気がしたけど、とりあえず見ないでおいた。

直ぐに本人も気づいたみたいだけど、ズズツって聞きたくない音が聞こえましたよ？

まあ、向こうも気まずそうに顔を赤くして視線を逸らしてるからそのことは突っ込まないであげよう。

「…ですから、説明もなしでいきなり選択肢を差し出されてもこちらとしては考慮することすら出来ないのです」

本当は説明なんて聞いたら面倒ごとに巻き込まれるのは確実なんだろうけど、行き止まりの場所に追い込まれてしまった以上、次善の策を練るために多少なりとも状況を把握しないとダメだよな？

そう自分に言い聞かせつつ、しぶしぶと王子様に説明を求める。

私の言葉にぱつと顔を上げた王子様はさすがのように見つめてきた上、ひしつと手をつかんできた。

「話を聞いてくれるか！」「伝説の…」

「ストップ」

言いかけた王子をつかまれていない方の手で制する。

「何度も言いますが、私はそんな「伝説の人」レジェンドなどという怪しいものになった覚えもつもりありません。今度そう呼んだらはおした挙句、踏み倒して二度と話を聞きませんのでご了承くださいませ」

額に薄っすらと怒りマークをつけたままニッコリと笑顔で通達すれば王子様が青ざめて何度ももうなずく。

……この人、やっぱりヘタレだわあ…

どう見ても年下だろう私にこんなに押されてて本当に第一王位継承者なんてやってられるのかしらねえ？

「それで、何故見ず知らずの私にそんな厄介事大役をおしつ…もとい提案されるのでしょうか？」

おっと、思わず本音が洩れもそうになった。危ない危ない。

一瞬餌代のかからない猫が背中から逃げそうになったわ（苦笑）

だがそのことに気づかなかつたらしい王子は暑苦しいまでの瞳で真剣にこちらを見ている。

「実は、このエフェノリア国は前代未聞の問題に悩まされているのだ」

そう言つてアレックス王子が滔滔と説明を شدしたのだが、これがまたやたらと長い！

延々と続く話を要約するとこんな感じだろうか。

このエフェノリア国は一方を海、三方を隣国に囲まれているのだが、最近その隣国の動きが怪しいというのだ。

まあ、ただ怪しいぐらいならどこの世界でも行つて諜報活動でちよちよいと調べて自国の軍備を増強するなり政治的手段とやらで火の粉を消せば問題はない。

だが、今回の怪しさというのはどうもそうということではなく宗教絡みらしい。

このエフェノリア国が存在する大陸は「オクスフォール」というらしく、国はエフェノリアを含めて十数カ国（群島を領土とする小国含む。いわゆる大国は4カ国）。

東に耕作地に恵まれ酪農が強いアスフェン。

南に良港と貿易が盛んなこのエフェノリア。

西に鉱山と工芸に秀でたアリアルイ。

北に宗教本山と学術の国ターゼン。

その他各小国が独自の特色を持っているらしいが割愛。

で、問題の発端は北にあるターゼンの大主教様とやらが下したお告げだそう。

その内容が

「この世界を治める神が何処かの国に降臨された。神を手に入れた国がこの世界全てを治めるであろう」

などというファンタジー設定では良くあるけど、巻き込まれたほうはたまったもんじゃないという碌でもないものだった。

「そのような訳で現在各国共に血眼になって「神」とやらを探しているのだが、正直なところうちの国王は搜索には興味がないようである……」

そついう王子もなんだか言いにくそつにだんだん語尾が弱くなつていく。

「だが、家臣たちは躍起になって「神」をわが国に！大陸制覇！とまあ、熱くなつていくので父上も、こつ、ちよつと、面倒になつてな……。とりあえず昔語りに出てくる「伝説の人」とやらを召喚して「神」とやらを探してもらおうかと……」

「ほおー……………」

私の絶対零度より冷たいであろう冷めた目線と口調に王子様の顔色が更に白くなつた気がする。

「つまりなんですか？どこの馬の骨かもしれない「自称・神」とやらを探索するのに兵を動かすのもめんどくさい、というかそんなことを考えるのも億劫だというそんな理由で私はいきなりこのような場所へと招かれた、と。そついうことですか？」

「あ、いや、さすがにそこまでは…」

王子様は体感気温が低くなったのか小刻みに震えているが私の知ったこつちやない。

私はさっさとはぐれてしまった省吾さんを探さなきゃならないのだから。

「い、一応勇者として「神」を探さなくても巫女姫でお茶を濁…いや、大義名分を使えば無理に探しに行かなくてもいいのだが…」

「そうして一生神殿とやらに拘束されて人生を終わらせられるんですね。……それにハイとうなずく人がいらっしやると本気で思われているんですか？」

ブリザードにでもあったかのように凍ってしまった王子の背後から不意に声がかかったのはその時だった。

へタレ王子なりの事情（後書き）

新キャラ？が影だけ登場して台詞を出してあげることが出来ませんでした（苦笑）

そして感想や拍手まことにありがとうございます！

作者、PCの前でにやにやが止まりません（笑）

おかげで家族に「初めて2chを見てる厨房みたくてキモイからやめろ」

といわれておりますが、そういわれても嬉しいものは嬉しいのです。

これを励みに頑張りたいと思います。

ちなみに拍手のお返事は活動報告でさせていただきますいております。

神官様はお目付け役？

「別に一生神殿に拘束するつもりはありませんよ？」

不意に掛けられた声にビックリして皇子の背後を見ると洞窟内で膝を折っていた白いローブ姿の男性が立っていた。

「お初にお目にかかります。私はエフェノリア国神官長、バーナビ・ルーンと申します。異世界よりお越しくださいました姫君、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

片膝をつき、左拳を軽く胸に当てるのがこの国の礼儀なのだろうか？それでもすらりとしたバーナビが丁寧に挨拶をしたので爽香も素直に挨拶をする。

「篋 爽香と申します。サヤとお呼びください」

「サヤ様、ですね。私のことはバーナビとお呼びいただければと思います」

「こんなやつ、バーニーで十分だ。バーニーで」

ボソツと呟いた王子にバーナビがニツコリと振り返る。

「公式の場でその名はお呼びにならないように、とあれほど注意いたしましたのに未だに覚えられないのでしょうか？」

ゴゴゴゴゴ……と書き文字が背後に浮かびそうな雰囲気だ。バーナビが立ち上がれば未だ座り込んだままだった王子が無意識に後ずさる。

あ、それ以上後ろに下がると落ちるんじゃない…

まずい。とおもって手を伸ばしたが、何故か王子の手は雲海を突き破らず床があるかのように浮いていた。

「え…？」

思わず声が出てしまったのをバーナビーが聞きとめて振り返る。

そしてアレックス王子の浮いた手と引きとめようとした私の手を見て納得したように軽くうなずいた。

「ああ、王子が何故雲海に落ちないか疑問なんですね？」

「はい。先ほど私が手を出した時は普通にすり抜けてしまいましたので…」

「未知のものに対して確認して無防備に行動しないのは賢明な判断です。確かにこの雲海はそのままでは全てを通過させてしまうただの雲です」

言いながらバーナビーは服の隠しから小さな青い石のついた首飾りを取り出して私の手のひらに置いた。

「この石は特殊な結界を張る魔石です。これがあれば雲海の上に乗ることも可能なですよ」

渡された首飾りを見ながら疑わしげな目を向けてしまったのは仕方

ない。

こんな小さな石一つで宙に浮けるなんてそれどこラピタ？って考えてるのは自然な流れだよね？

私の疑いの目にバーナビー神官長は苦笑いすると、自分の服から同じような石のついた飾りを見せてから雲海の上に足を踏み出す。

するとその足元には床があるかのように普通に雲の上に立っているではないか！

ふと見れば先ほど逃げようとしていた王子も雲の上にちゃんと立っている。

「サヤ殿、改めてお願いを致します。詳細のご説明とそれを知っていた上でわが国を助けていただけませんか？」

「あ、ああ、そうだな。サヤの身柄はオレが保証する。エフェノリア国の賓客として招待するのでまずは王宮へ来ないか？」

二人の説得に私は暫し考えた後、とりあえず詳しい説明を受けるために王宮へ行く旨を承諾したのである。

しかし、平和な土曜の午後、せつかくの省吾さんとのデートタイムがなんでもいきなり異世界トラベルのスタート地点になってしまったのでしよう。

それに突っ込んでる暇がなかったのでスルーしてしまったけど、ど

う考えてもこの世界で話してる言葉って日本語じゃないよね？

海外赴任中のお父さんや一の兄じゅいちちゃんが大学の専攻で世界各地の遺跡とか文明を研究してるせいでうちの家族はわりと外国語に精通してるとは思うのだけど、異世界じゃ外国語が出来ても関係ないよね。

まあ、文字はまだ見てないので読めるかどうかはわからないけれど、とりあえずリスニング・ヒアリングに不自由しないのはありがたいことです。

あとは、どうやら怪しげな魔術っぽいものもこの世界にはありそう。結界張れる石なんて現代日本には存在しないと思うし。

ああ、あとは宗教問題もあるのか…

現代ですら宗教はデリケートに扱わなきゃいけない分野ジャンルだからあまり首は突っ込みたくないんだけどなあ。

あ、ちなみに篁家は基本的に無宗教です。

でも、家訓はあります。

「一人では決して生きてはいけないのだから、自分を生かしてくれ
る全てのものに感謝を」

これは食べ物や環境、人とのつながり、全てを指していると思うの。
だからと言って感謝するだけの受身じゃダメ。

ちゃんと自分からも動いて還元しなきゃいけないとお母さんから昔
から言われてきた。

全く持ってその通りだと思う。

だから王子たちがこの世界で私の身を保障してくれると言う申し出
に対しては感謝してその恩は返すのはやぶさかではない。

だけど、いきなりこんな異世界に呼び出されたことに対してはきつちりと落とし前をつけてもらわないとね。

「目には目を。歯には歯を」

いい言葉じゃないけど、実は裏家訓だったりする（苦笑）

はあ、それにしてもなんだか省吾さんを探すのに問題山積みだなあ。早く探して家に帰りたいものです。。

神官様はお目付け役？（後書き）

次回からは王宮などが舞台になります。

多分、登場人物も増えるはず。

あまり多くなると自分の首を絞めそうなので大風呂敷を広げすぎないように気をつけたいと思います（苦笑）

異世界からの訪問者はなにかが違つらしい。

そんな訳で、バーナビー神官長とアレックス王子に案内されて雲海を渡り、また門をくぐつたら何故か地上に到着していた。

私たちが出てきた扉はどうやら神殿の祭壇の間にあるようだった。ただっ広い部屋なのに、一段高い場所の壁にしつらえられた扉。それがこの祭壇の間の重要物みたい。

「この扉は異世界よりの召喚者を求める場合にしか開きません。今回は国王の命により「神」を探すために異世界より勇者を招かねばならなかった為、この扉が開きました」

神官長のお言葉に私は閉じてしまった扉を見つめる。

「バーナビー神官長。一つお伺いしてもよろしいですか？」

「私でお答えできることでしたらなんでも」

「召喚された人は元の世界に帰ることができるのでしょうか？」

私の質問に神官長は少しためらつた後告げる。

「私どもがサヤ殿をお呼びしたように、サヤ殿の世界からサヤ殿をお呼びする「声」がとどいたなら」

「そうですね……」

かなり予想をしていた答えだったので特に落胆はしない。

異世界トリップモノの小説や漫画では帰る手段はない。といわれるのは良くあることだし。

それに比べれば、ヒントがもらえただけでもありがたいほうだと思う。

要するに、元の世界とこの世界に何らかのバイパスを作ればいいわけだ。

多分、元の世界では今頃私と省吾さんが行方不明になったのが家族に伝わっているだろう。

そしてその足取りを辿るため、家族が奔走しているのも予想が出来る。

その結果、私が学校帰りに秋葉で鉱石ラジオのキットを購入したことも直ぐ突き止めるだろう。

であれば、あの兄たちのことだ。私が無事であれば電波を受信できる方法を考えていると直ぐに考えつくはず。

そうすれば向こうから呼びかけてくるのは間違いない。

まあ、問題は異世界まで電波が届くかって事だけなんだけど…。多分何とかしてくれると期待しよう。

「サヤ、迎えの馬車が用意できた。行くぞ」

アレックス王子の呼びかけに私は扉から視線を外し馬車へと向かった。

「わあ〜…‥‥‥綺麗な町並みですね」

神殿は郊外の高台にあったのだが、そこから王宮まで向かうまでに
見えた風景は絶景としか言いようのないものだった。

右手遠くに紺碧の海、左手に山を背後にして王宮が建っている。
王宮と海の間広がるのは城下町。

馬車が走る道は丁寧に均されていて、馬車に乗っていてもそれほど
ガタガタはしない。
まもなくして入った城下町の大通りもきちんと整備されているよう
だ。

…まあ、その分裏道に問題があるのかもしれないが表向きはとても
清潔である。

街の建物は白壁を貴重とした平屋建ての建物が多い。

二階、三階建ての建物は城に近づくと増えてくるという感じだ。

お約束に洩れず城に近い方が身分階級の高いものの屋敷になるとい
うことだろう。

そんな街並みを抜け、いよいよ城内の敷地へ入る。

とはいえ、城門をくぐってから実際城の車止めまでは優に20分は
かかっただろう。

ようやく馬車を降りたときにはちょっと足元が揺れていたのは仕方
ない。

「ほら、掴まれ」

「あ…、ありがとうございます」

そう言って一足先に馬車から降りたアレックス王子が手を差し伸べ

てくれるので遠慮なく手を借りる。

「「「お帰りなさいませ、アレックス様」」」

私が降りると同時に並んで出迎えをしていたメイドさん、Sが挨拶をする。

「ああ。エレーナ」

「はい」

エレーナと呼ばれた女性が一列に並んでいたメイドさん、Sから一歩前が出る。

「こちらが召喚の儀に応えてくれた方だ。名前はサヤ。身の回りの世話を任せる。不自由の無いように」

アレックス王子の指示にエレーナが私の前に来て左拳を胸にあて、軽く膝を折った。

「ようこそお越しくございました。私は女官のエレーナと申します。この度サヤ様の身の回りのお世話をさせていただきます。そしてこちらの者が」

エレーナが振り返ると並んでいたメイドさん、Sから新たに3人が進み出ると同じように礼を取る。

「左からヴァーリア・シーラ・メリツサです。彼女らを部屋付となりますので、何かございましたらお申し付けください」

部屋付の侍女といわれたヴァリーリアは緋色に近い燃えるような赤毛に緑の瞳。ちょっとつり目気味の顔立ちは一見きつそうに見えるが、その瞳の中には優しさが見て取れた。

「ヴァリーリアと申します。心を込めてお世話をさせていたきたいと思しますのでよろしくお願いいたします」

シーラは薄い金髪に茶色の瞳。ヴァリーリアとは逆に少し目じりが下がっているのが可愛い。見た感じ侍女3人の中で一番年下のようだ。

「シーラです。精一杯頑張って勤めさせていただきますっ」

そしてメリッサは薄い水色の髪に青い瞳。3人の中で一番落ち着いた感じがする。

「初めまして姫君。わたくしはメリッサと申します。部屋付侍女兼女官見習いです。至らぬ点がありましたらお申し出いただけますようお願いいたします」

どうやら王子が私のために用意してくれた部屋には女官や侍女さん（こちらではメイドとは言わないようだ）がついて世話をしてくれるらしい。

このあたりも身分の保証の一貫なのだろう。

一応、王子が賓客として招いたということなのであまりびくびくと挙動不審では王子の格を下げてしまうかもしれないので高飛車になり過ぎないよう気をつけて私も挨拶をする。

「丁寧な挨拶をありがとうございます。薫 爽香といます。こちらのごことはわからないことばかりですので色々ご迷惑をおかけし

てしまうかもしれませんがよろしく願います」

ニツコリと笑い、軽く膝を曲げ、膝丈の制服のスカート裾を軽くつまみ腰を落とす。

本来は裾の長いドレスでやらないと様にならない礼のしかたなのだがこの際それは言わないお約束ということだ。

この世界の挨拶はいくつか見たけれど、どうやらどれも身分の高い相手に対する最高礼のようなので「伝説の人^{レジェンド}」という最高級の身分で呼び出されたらしい私がするのはおかしいだろうと判断だ。

姿勢を戻し、侍女さんたちを見れば全員がうつとりとした目で私を見ている。

あれ？何か間違ったことしたかな？

周囲の様子がなんだか異様なので慌てて神官長を見るとその神官長すらちよつと目を見張って見つめているではないか。

「あ、あのバーナビー神官長？私、何か変なこと致しましたか？」

小声で問いかけると神官長がハツと我に返ったふうに瞬きをする。

「あ…い、いえ、なんでもありません。ええ、なんでもないのですよ」

そういつた神官長の顔がちよつと赤かった気がするのも気のせいかなんだろうか？

「で、では王子は陛下に帰還のご挨拶とサヤ殿のことをご報告に行

かねばなりませんね。エレーナはサヤ様を部屋までご案内をお願いします。……サヤ殿、また後ほど伺いいたしますのでこの場は失礼致します」

少し慌てた雰囲気の中、神官長は王子をせきたてるように席を外し、私はエレーナさんの案内にしたがって部屋へと移動することになった。

異世界からの訪問者はなにかが違つらしい。(後書き)

亀の歩みの進みですみません・・・。

でも爽香が魅了チャームの魔法を使ったわけでもないのにあの神官長が赤く
なつてます(笑)

これから誰を誑し込んでいくのかちょっと不安です。

閑話 王子と神官長（前書き）

本編途中ですが、爽香の一人称では書ききれない面のことを閑話として時々挟んで行きたいと思います。（こちらは三人称で進みます）

閑話 王子と神官長

バーナビー・ルーン、28歳。職業エフェノリア国・エレミア教神
殿神官長。独身。

彼は常にないことに非常に動揺していた。

元を返せばエレミア教総本山であるターゼンの大主教からのお達し
で降臨された「神」とやらを探すことになったのが発端である。

現エフェノリア国の国王陛下はのんびりとした気質で、自国の領土
をこれ以上増やしたいとか世界を手中に収めたいなどという野望と
は程遠い人物である。

だが、大主教のお達しにより各国が血眼になって「神」を探してい
る現在の状況でエフェノリア国だけ知らん振りをしているわけには
いかなかった。

エフェノリアが領土拡大を求めているなくても他国が求めているとい
は限らないのだ。

表向き四大国は安全保障同盟を組んでいるが、水面下ではきな臭い
動きが頻発しているという情報も入ってきている。

仕方なく国王はエフェノリアに伝わる秘儀により、異世界よりの召
喚者「伝説の人^{レジェンド}」を呼び出しこの窮地を救ってもらえるように頼む
ことにしたのだ。

結果呼び出されたのは16歳の少女、「篁 爽香」。

突然異世界に呼び出されたというのにパニックになることもなく落ち着いて冷静に行動が出来る謎の少女。

見た目は背の半ばまである漆黒の髪に夜の闇を映したような深い黒。薄いアイボリーの肌と大きな瞳は全てを見透かすような不思議な透明感があり、紅を乗せたわけでもないのに赤い唇が実際の年齢より大人びた印象を与えている。

……つまり、誰が見ても美少女である。

話す言葉も丁寧で、女官たちに対しても驕った様子は全く見当たらない。

そんな彼女が異世界風の挨拶とともに微笑んだ瞬間、バーナビーを含めてその場にいた全員が一瞬にして魅了されたのだ。

この世界では神官は異性禁止という項目もないし、実際妻帯者や家族持ちの神官も多い。故にバーナビーもそれなりに恋愛経験はあった。

それでも本気の恋はしたこともないし、することもないと思っていた。

今まで付き合った女性といえは家柄やその特権を意識した物たちが圧倒的だったし、バーナビー自身もひと時のもの、と割り切っていたから別れる時も後腐れなかった。

それなのに一回りも下の少女に見惚れるなどありえない。

そう一番思いこみたかったのはバーナビー本人であっただろう。

「……………はあ」

「どうしました、アレク？」

「いや、……………その、なんだ。サヤなんだが……………」

国王へ謁見するために廊下を歩いてきたアレックスとバーナビーだったが、ため息を漏らすのを聞いて声をかける。

「アイツ、あんな風に笑えたのか?! オレには冷めた態度しか取らなかったのに。……心臓が止まるかと思っただぞ」

興奮なのか驚きなのかわからないがアレックスの顔は真っ赤である。

「貴方に対して冷めた態度をとっていたのは仕方がないでしょう。第一印象が悪すぎます。そもそも、何の説明もなしに要求を突きつけるとは外交手段として最悪ですね。これが実際の外交であれば戦を引き起こしたとしても文句は言えないでしょう」

「バーニー、おまえ冷たすぎるぞ…。自分だけサヤに気に入られやがって……………」

「なんとでもおっしやい。私は初対面の相手に対して正当な礼を取ったまです。それになんですか、子供のように拗ねるなど王子としてふさわしい態度ではありませんよ」

バーナビーの言葉にアレックスが「これだから容赦も遠慮もない乳兄弟はなあ……………」とブチブチと文句を言っている。

アレックスの言葉通り、バーナビーとアレックスは乳兄弟である。バーナビーの母が王妃付きの筆頭女官長であり、王子・王女たちは皆バーナビーの母を乳母として育てている。

バーナビーはアレックスより6歳上だが、待望の第一王位継承者が生まれたときからその傍において王子を支える側近として仕えるように決まっていた。

だが、本人は王子側近として支えるのではなく、国のもう一つの柱でもある神殿に入り、そちら側からアレックスを支えようと決めていた。

だからアレックスが物心つく前からスパルタ的に「第一王位継承者」としての心構えを叩き込み、アレックスと一つ違いの自分の弟を王宮側の側近として育て上げた。

ちなみに、「アレク」「バーニー」は身内でしか使わない愛称なのでアレックスが他人のいる前でその名を呼ぼうものなら後ほどイヤというほど説教を受ける羽目になるというのはまた別のお話。

「まあ、兎に角。貴方はサヤ殿になんとか役目を引き受けていただけるように説得をしてください。……彼女が引き受けてくれないことにはわが国の将来は暗いものになりますからね」

「う……………わかった。なんとかやってみる」

「私は引き続き降臨された「神」とやらの情報を探ってみます。探すにしても特徴も何もわからないままでは探しようがありませんからね」

そんなことを話して居る間に国王の執務室までたどり着けば、扉の

左右を守る護衛が王子と神官長を見て敬礼すると扉を開ける。

さて、陛下にどんな説明をしたものか。

そう思うことでバーナビーは爽香に対して感じた一瞬の思いを忘れることにしたのであった。

閑話 王子と神官長（後書き）

爽香、ようやく美少女と表現してあげられました（笑）

アレクとバーニーの関係はチャンスを見てまた書いて行きたいと思
います。

二人がもいつ自覚するのか楽しみです（酷）

神官長の腹の色

エレーナに案内された爽香に割り当てられた部屋というのは王宮の西棟にあった。

元々西棟は外国からの賓客などが滞在する時に使われるのがメインなのでどの部屋も凝った内装になっていた。

その西棟の中でも最も景観のよい3階の角部屋が爽香のための部屋なのだが、本来ここは他国の王族しか使えない部屋である。

まあ、そんなことは知らない爽香は素直に割り当てられた部屋の美しさに感心していた。

「おお…凄い部屋だ…」

「お気に召していただけましたでしょうか？」

「あ、はい。このような素敵な部屋を用意していただき誠にありがとうございます」とうづこいします

思わず素の言葉遣いが洩れてしまったがエレーナは気づかなかったようにニッコリと笑う。

「今宵の夕餉はアレックス様とバーナビー様が同席されるとの事です。その前に湯浴みとお着替えを致しましょう」

エレーナの言葉に侍女3人衆がササツとお風呂と着替えを用意してくれた。

確かにバタバタしていたせいもあってちょっと埃っぽいのでお風呂は嬉しい。

それとこんな世界だからきつと着替えはドレスに違いない。基本的

に動きやすい服が好きだけど、滅多にないチャンスだからどんなドレスを着せてもらえるか楽しみである。

そんな訳で内心うきうきと浴場にむかったが、結果は予想以上のものだった。

「どうしましたサヤ殿。何かお疲れのようですが」

「なんだ？部屋で一休みしていたはずじゃなかったのか？」

「……………ナンデモアリマセン・ダイジョウブデス」

夕餉の支度ができたとヴァリーリアが呼びに来たのでよろよろと隣室に向かうと既にそこにはアレックス王子とバーナビー神官長が着席していた。

二人が私を見た途端驚いたように問いかけてくるが、正直答えるのもめんどくさい。

とはいえ、心配そうに見る二人をあまり邪険にするのもねえ…。

ちょっと遠い目をしながら思い返せばまず湯浴みを、といわれて連れて行かれた浴室がだだっ広かったのはともかく、皮が3枚ぐらい剥けるのではないかと思えるほどガシガシと浴室付きの女性に洗われたり、アバラが折れるんじゃないかと思うほどぎゅぎゅうにコルセットを締められたり、髪が抜けるんじゃないかと心配するくら

いに髪を結い上げられたりしただけです。

うん、世の中のファンタジー世界にトリップしちゃった主人公の苦
労を身をもって体験しました。

こんなのが毎日続いてても耐えられる主人公たちを尊敬します。

「何か不都合がありましたらお申し出下さい。改善させていただきますので」

バーナビー神官長の申し出はありがたいけど、アレがこの世界の常識なら少しは我慢しなければならぬだろう。

「……何事も初めてのことばかりなので慣れないだけです。ご心配ありがとうございます」

作り笑いだけでも顔に貼り付けて答える。

……あれ、またアレックス王子が赤くなってる。

どうしたんだろう？と小首を傾げると真っ赤になった王子が視線をそらして早口で神官長に声をかけた。

「と、とりあえず冷める前に食べよう。陛下への謁見の件に関しては食事後に伝えるということでもいいだろうか？」

こうぎゅうぎゅうに締められてどこまで食べられるかは謎だが食事自体に異はなかったので私があなずくと神官長も同意して豪華な食事は始まった。

夕餉の内容は文字通り非常に豪華だったが、素材に何が使われているのかは今一よくわからない。まあ、わからなくても美味しければいいのだが。

セちゃん 三の兄あたりなら興味を持って素材から調べてアレンジしたいとか言い出すだろうなー。

あの兄は意外と料理を作るのが好きなのでたまに作ってもらえるとても嬉しかったのだ。

あ、でもデザートで出てきた赤いフルーツの入ったゼリー寄せもどきはすごくおいしかったので機会があつたら作り方を覚えたいところかな。省吾さんに再会したとき作ってあげたいし。

食後のお茶を飲みながら王子が教えてくれたことによれば、明日の朝、国王陛下と謁見が待っているらしい。

その場で私に突きつけられた「勇者or巫女姫」のどちらかを選ばなければならぬらしい。

だけど、どっちもイヤだって断ってるんだけどなあ…

「サヤ殿がわが国の思惑に乗せられるのが嫌だとおっしゃる気持ちもわかります。ですがこのまま何もせずに居ても状況が変わらないということにも聡明なサヤ殿ならお気づきかとは思いますが？」

バーナビー神官長の言い方にちょっとカチンと来るが、それは事実だよな。

確かに動かなければなににもできないし、私一人で右も左もわからないこの世界で省吾さんを探すことは難しい。

「確かに神官長の仰るとおりです。ですが、私はこの世界で探さなければいけない人が居るんです。あ、もちろん「自称・神」なんて怪しい人ではありませんよ？私が呼び出されたときに共に居た大切

な人を探したいのです」

「その人物もこの世界にきているという確証はあるのか？」

「いいえ。確証などありません。ですが省吾さんがあの状況で私を手放すなどありえない。そのことを知っているからきつと巻き込まれてこちらの世界に來ていると思うのです」

「シヨーゴサンですか？その方はどんな方なのでしょう？」

「省吾さんは私にとって一番大切な方です」

はつきりと言い切った私に王子も神官長も戸惑った表情になる。

「その、シヨーゴサンとやはは、その、なんだ、サヤの想い人なのか？」

そう問いかけてくる王子に私は大きくうなずく。

「ええ。私の恋人（予定）です」

暫定ではあるけどそう言っておこう。うん。省吾さん本人からはまだOK貰ってないけど、省吾さんが私を気に入ってくれてるのは知ってるし、照れ屋さんだから素直になれないだけってわかってるしねっ！

私の考えをどう取ったのか、なぜか王子が暗くなっている？

急に暗くなつた王子を不審に思いつつ神官長に理由を尋ねようとしたがその神官長はあまりにも無表情すぎて尋ねる気にはならなかった。

『神官長、何か怒ってます?』

そう問いかけたくなるほど不機嫌なオーラが出ていた神官長はカッ
プに入っていた紅茶を飲み干すとおもむろに立ちあがった。

「さて、そろそろ夜も更けて参りました。サヤ殿はお疲れでしょう
から今宵はゆっくり休んでいただきましょう。陛下へのお返事につ
きましてはゆっくりと考えていただければ。……ああ、そうそう、
一つだけ情報を」

そういったバーナビー神官長の笑顔がなんだか黒く見えたのは気の
せいじゃないと想うんですが。

「最新の「神」の情報が入りました。「神」は異世界から来られた
男性で黒髪・黒瞳だそうですよ。…今、このタイミングで異世界か
ら来た男性というのはそう多くないと思うのですがね」

「!!!!!!!!!!」

驚きのあまり立ちあがった私に対し神官長が恭しく礼を取る。

「では、明朝お迎えにあがります。…さあ、王子参りましょう」

「あ、ああ……。では、な」

バーナビー神官長が王子を引きずって出て行くのを見送った後、私
の絶叫が部屋に木霊した。

「ああああ、あの喰わせものがあああああ~~~~~!!!!!!」

そう、神官長が提供した「神」とやらの情報が示すのは私が探す旨
吾さんへの手がかりに他ならなかったのだ。

神官長の腹の色（後書き）

バーニー神官長、腹黒決定。そしてSです（笑）
爽香ちゃん、相当お冠ですね。まあ、ある意味同属嫌悪気味な気も
しますが（苦笑）

選択肢の行方

一夜明けて。

バーナビー神官長からの情報で選択肢が一つしかなくなってしまったことで非常に不本意なまま目が覚めた。

「お目覚めですか？サヤ様。ご準備が整い次第バーナビー神官長様がお迎えに来られるとの伝言を承っておりますのでお支度をお願いできますでしょうか？」

部屋の隅に控えていたメリッサが窓に近づくとさっとカーテンを開ける。

その途端眩しいほどの朝の光が部屋の中を照らした。

「ん……まぶし……」

思わず片手をかざしたが、メリッサはお構いなしで控えの間に声をかけている。

うーん、まあ、出会ったのが昨日の今日だし急に仲良くなるうとは言わないけど、メリッサさんってちょっとつつけんどんだよー。そう思う反面、まだお互いのことを何も知らないのに一方的な評価を下した自分を反省する。

メリッサさんに限らず、侍女さんたちやエレナさんには今後もお世話になるわけだから先入観を持たずに素直に向き合えないとね。

「サヤ様ー！本日のお召し物はこちらのドレスでいかがでしょうか」

嬉しそうな声で淡い青色のドレスを持ってきたシーラが私の前に広げる。

「えっと、今日は陛下との謁見があるんですよ。なのであまり派手すぎず、地味すぎず、尚且つサヤ様の御髪の色に映えるようにと選んでみましたー」

確かに、シーラが選んだドレスは水色よりも濃く、紺色よりも淡い絶妙な濃淡の色合いで、白ではない真珠色のフリルが上品なアクセントとして仕上げてある。

「シーラ、落ち着きなさい。サヤ様、おはようございます。お支度が終わりましたら隣室にて軽い食事のご用意も出来ておりますので」

「ありがとうございます。それと、メリッサさん、シーラさん、ヴァリーリアさんおはようございます。今日もよろしく願います」

私がベッドから降りて丁寧に頭を下げると3人とも動きが止まってしまう。

「あ、あの？」

頭を上げると困惑した様子の3人が居るので私も困ってしまう。

何が悪かったのかな？

そんな微妙な雰囲気を救ってくれたのはやはりベテランのエレーナさんだった。

「サヤ様、侍女に謙る必要は^{へりくだ}ありません。逆にそのような態度を取られますと彼女たちが困りますのでおやめください」

「ですが、私のために動いてくれる人にお礼というのは悪いことなのでしょうか？私には自分のために誰かが何かをしてくれたならそのことに感謝の心を持つように。と教えられてきました」

別にそこまで謙ったつもりはないのだけど、多分この世界は厳格な階級社会なのだろう。

「もしかしたら私が皆さんに頭を下げたりするのはこの世界のマナーとは違っているのかもしれませんが。ですが、実際にお世話になっているのに感謝できなかったらそれこそ元の世界に帰ったときに両親に怒られてしまいます」

私が異世界レジェンドからの召喚者だということがどのレベルまで広がっているのかはわからないが、少なくともこの場にいる人たちはそのことを知っている。

だからある意味VIPクラスの私が侍女さんたちに頭を下げるというのはこの世界のマナーとしては間違っているのだろう。

でもやっぱり私としてはお世話になっているんだから感謝の気持ちは伝えたいわけで。

そんな風に私が悶々としているとエレーナさんが苦笑した。

「サヤ様は素直な御気性なのですね。仕える者たちのことも考えていただけるとは…。そのようなサヤ様にお仕え出来て私どもはそれだけで十分でございます」

見れば侍女さん3人も感極まった様子で立ち尽くしている。

ああ、シーラさんなんてドレス握り締めて今にも泣き出しそうだ。

「サヤ様のお心遣いは非常に嬉しく思います。ですが、お察しの通

りこの世界は階級社会でございます。サヤ様は私どもにしてみれば
言わば神の御使いともいえる尊きお方。そのような方が下々のもの
にあまり親しくされますとサヤ様だけでなく陛下や殿下の評判にも
影響が出る恐れがあります」

「御使い云々はさておきますが、私の一挙手一投足が見られている
ということですね。その結果、私を召喚した陛下やアレックス王子
にご迷惑がかかるのは私としても不本意です。ですが…」

エレナさんの言うことは正しいし、理解は出来る。でもだからと
言って納得できるかといえばねえ…。

そんな私にエレナさんは片目をつぶって一つ提案してきた

「ですが、それでは息が詰まって仕方ありませんでしょう。そこ
でこの場にいる者の前ではサヤ様のお国の習慣を使われても構わな
いということに致しましょう。ああ、でも私どもに敬称や敬語は不
必要です。それだけは慣れていただかないとこの先ご不便が出るこ
とが多いでしょうから」

おお！エレナさん話がわかりますね！

やっぱり人間「挨拶・感謝・謝罪」はコミュニケーションの基本だ
よね。

そんな訳で改めて皆に挨拶をするときこちないながらも皆笑顔を返
してくれた。

そしていよいよ陛下との謁見の時がやってきた。

傍についているのはバーナビー神官長。

陛下の隣には王妃とアレックス王子が並んでいる。

「タカムラ、サヤカ殿。既に神官長より聞き及んでいると思うが、現在わが国では異界より来訪されたという「神」を求めている。「神」をわが国にお迎えすることがわが国を救うことになる。」

玉座に座ったままの陛下の言葉を私は頭を垂れたまま拝聴する。

「そこで「伝説レジェンドの人」たるそなたに「神」を探す勇者となるか「神」を祭る巫女姫となるか選んでもらいたい。」

言葉上は選択肢があるが、実際のところ一つしか選ぶものの無い私は不本意ながらも顔を上げ、まっすぐに陛下を見つめ返す。

「私は「神」を探しに行きたいと思います。」

篁 爽香、16歳の誕生日が勇者誕生の日になった瞬間だった。

選択肢の行方（後書き）

シーラはかなり子供っぽいですね。爽香より年下の設定なので仕方ないかもという気がします。侍女として大丈夫なのかちょっと心配にもなります（苦笑）

そしてユニークアクセス数が3,000を越えてました！
稚拙な文章ですが見ていただけて本当に嬉しいです！ありがとうございます！
ございます！

「伝説の人」の立ち位置

なんだか謀られたかのように「自称・神」とやらを探しに行くハメになってしまったけど、私のメインはあくまで省吾さん。

バーナビー神官長情報によればどうもその「神」が省吾さんっぽい気配がするんだよね。でもあの省吾さんが神様って似合わなすぎる。

だって省吾さんは長身で体格が良くて目つきの悪さを隠すためにいつもサングラスをかけている人だ。

その外見で何度やばそうな人に喧嘩を売られそうになったことか。

その実体は見た目に反してとても優しい人だ。

小動物が好きだったり、一度身内として認識した人にはとことん優しい。

だけど一度敵にまわすとあれほど怖い人も珍しいかもしれないと思う。

基本的に平和主義者だけど、その体はSPとしての実力をいつでも発揮できるように無駄なく鍛え上げられている。

大柄な体格に反してとても俊敏だし、冷静で状況判断を誤ることなんて私の知っている限りではなかった。

そしてなによりアメリカ留学時代にいろいろところで鍛え上げられたらしくて銃火器の扱いやCQC（Close Quarter Combat 近接格闘）もマスターしているというところでもない人なのだ。

そんな人だから突然知らない世界に放り出されたとしてもとりあえ

ず無事でいると思うのよね。サバイバル経験もあるって言ってたし。でも、やっぱり早く逢いたい。

私は幸か不幸かとりあえずの後ろ盾を持たたから急に困ることはない。

だけど省吾さんは困ってないだろうか？

そう思うといてもたってもいられず王宮を飛び出して探しに行きたくなってしまっ。

ただどどういうわけかお付というかお目付け役がつくことになってしまっって一人で勝手な行動を取ることができなくなっってしまったのよねえ…。

謁見の間を辞して自室に戻ると早速神官長が探索のための準備について話してくれるらしい。

（ちなみにアレックス王子はやることあるとのことで謁見の間を出て直ぐに別れた）

「では勇者サヤ殿。「神」探索のための出立は一月後になります」

「何故一ヶ月もかかるのですか？それと勇者と呼ぶのはやめていただけませんか、バーナビー神官長」

「「神」の探索を請け負ったということは勇者になると決めていただけだと思っていたのですが？まあ、そう呼ばれるのがお嫌ということであれば善処いたしましょう」

うわ、なんでこんな上から目線なんだろう。こういう態度は良くないと思うのよね。

神官長の言動にちよつとカチンときたのでいつかぎゃふんと言わせてやるつと心に誓う。

「さて、一ヶ月という時間は探索に同行する者たちの調整及びサヤ殿への教育期間となります。まさかこの世界のことを全く知らないまま探索ができるとは思われませんかよね？」

バーナビー神官長のことばに思わずうつと言葉に詰まる。

確かに世界情勢含むある程度の基礎知識を得てからではないと別の厄介事に巻き込まれたりした時に立ち往生する可能性が高い。

だから基礎知識を学ぶというのであれば本来は一月という期間でも足りないだろう。

まあ、この神官長のことだから一月というのであればその間にスパルタでも詰め込んできそうな気はするけどね……。でも、探索に同行する人たちとは？

「今回の探索はきわめて重要、かつ極秘のものとなります。それはサヤ殿の身柄も含みます」

うん？私の身柄？それは「伝説の人^{レジェンド}」とかいう身分のことなのだろう

うか？

そういえば「伝説レジェンドの人」が国を救うとか守るとかというのは聞いたけど、それはこのエフェノリアから見た立場。

この立場って他国から見るとどうなるんだろう？

ちよつと嫌な予感がしつつも重要なことなのでバーナビー神官長に尋ねる。

「一つお伺いしますが、「伝説レジェンドの人」という立場は他国から見るとどのような立ち位置にいるのでしょうか？」

私の問いに神官長は良く気づいたというように感心した表情になる。うわー、更に嫌な予感が倍増したぞ？

「エフェノリアにおいて「伝説レジェンドの人」はこの国を栄えさせてくれる偉人に当たります。ですが他国から見れば自国以外が繁栄しすぎるのはあまり好ましくありません。」

「つまり……」

「他国から見れば「疫病神」と等しいでしょうね。はっきり言えば存在されると困る、いなくなつて欲しい存在でしょう。」

あああ、やっぱりそう来たかー！

つまり私はエフェノリア国内にいる限りはちやほやされるけど、一歩国境を出たら命を狙われるってことですな。

そういうことを最初に伝えないあたりやっぱりこの神官長はいい性

格してると思う。

「まあ、そういうことです。から探索の旅には優秀な護衛を同行させていただきます。とりあえず武官を3名、魔術師を3名、それにサヤ殿の身の回りの世話をする侍女を2人」

「私を含めて全部で9名ですか。この人数を多いと評価すべきなのでしょう？それとも少ないと思うべきなのでしょう？」

「サヤ殿の身を安全を確保するという点であれば少ないかもしれませんが。ですがあまり大人数で移動すれば他国に探索範囲を広げたときに不審に思われてしまいますのでこの人数が限界かと」

それにもしかしたら…と神官長が何か言いかけたが確定事項ではないらしくその先は教えてくれなかった。

「侍女についてはエレナ殿に一任してあります。詳しくは彼女に聞いてください。その他の護衛につきましては一週間以内に選抜してご連絡いたします。それまでは女官長の指示に従ってこの世界のことを少しでも学んでおいてください」

バーナビー神官長はそう言うつと忙しそうに部屋を出て行った。

はあ、なんだか省吾さん探しの旅はスタート地点にすら立ってないような気がしてきたぞ。

そんな私の大きなため息が広い部屋に響き渡ったのをとがめる人はとりあえず誰もいなかった。

今時の侍女の必須スキル（前書き）

ちょっと長めです。

今時の侍女の必須スキル

国王陛下との謁見が終わってからの日々はバーナビー神官長のお告げ（？）どおり毎日びっしりとこの世界についてのお勉強が続いていた。

「はふー……流石にちょっと疲れた」

「ふふふっ。毎日ぎゅちりとスケジュールが詰まっておりますものね。お疲れさまです」

ぱたりとテーブルの上に倒れた私にメリッサさんが香りの良い香草茶を淹れてくれた。

このお茶はハーブティーみたいな感じで爽やかな香りとちよっぴりの甘みとスッキリした飲み心地で今のお気に入りの一つだ。

「ありがとう、メリッサ。…うん。おいしい。これ飲んだらもう少し頑張るね」

「どういたしまして。しかし、あまり無理はされませんようにね」

「課題を出した本人にそういわれてもねえ。兎に角覚えないうちに困ることだから頑張るよ」

そう、今私が学んでいる世界史や各国の情勢などを教えてくれる先生とはメリッサさんたち侍女さんたちなのである。

最初は専門の教師がやってきてアレコレ授業があると思っていたので、エレーナさんからこのことを聞いた時は驚いてしまった。

詳しく聞くと更に驚いたことにヴァリーリアさんは女性王族向けの親衛隊（もちろん隊員も全部女性）の副隊長を務めていたこともある武道の達人だったし、メリッサさんは王立の大学府で教鞭をとったことのある才女でシーラさんはあのバーナビー神官長の直弟子、それも秘蔵っ子と呼ばれるほどの魔術師だった。

そしてもちろんそんな彼女たちを従えるエレーナさんが只者のわけではなく、長年王宮に仕え、私があるまでは王妃様の腹心として公私にわたって活躍していたということだ。

そう考えると誰がさい配してくれたのかはわからないが、彼女たちを私に付けてくれた人は私のことを非常に高く買ってくれているらしい。

そうなればその期待を裏切るわけには行かないので私としても教えてもらったことは全て吸収して見せましょう！

「サヤ様は勉強熱心ですし、お教えしたことを直ぐに理解していただけますので私としてもお教えのし甲斐があるというものですわ」
にこにこ嬉しそうに言うメリッサさん。

初日こそつつけんどんな態度でとつつきにくいかな？と思ってしまっただが、話してみると頭の速度は早いし、話題も豊富なので彼女といろいろな話をするのは非常に楽しかった。

まあ、シーラさんに言わせると

「メリッサさんは頭がいいせいか、反応の遅い人とか常識のない人

とか大嫌いなんですよー。本人の前では言いませんけどねー。サヤ様はこの世界のこと何も知らないでしょう？だから最初はこのお仕事引き受けたくなかったらしいですよー？」

というこらしい。

「でも、サヤ様はわからないことは直ぐに聞いて正しい知識を得ようとするしー、応用も利きますから、メリッサさんの見方も変わったみたいですねー。よかったですよー、あの人に気に入られる人って少ないんですよー」

語尾を延ばして喋るシーラさんのしゃべり方こそメリッサさんの気に障るんじゃないかと余計なことかと思いつつ心配して聞いてみたが、

「あー、それは大丈夫ですよー。実は私、メリッサさんの従姉妹なんですよー。なので昔っからこんな喋り方なのは慣れてますしー、それに実力さえ示せばその他の事あまり細かく言ってこないんですよー」

…… 凄く意外な話を聞いてしまった。

あの理知的でリアリストで型にはまったようなメリッサさんと自由奔放、直感勝負で枠にはまらないシーラさんが血が繋がってるとは話しても誰も信じないのではないだろうか。でも、二人とも実力も才能もあるのは確かだ。

「ついでにもう一つ言っちゃいますとねー、神官長も私たちの親戚に当たるんですよー」

「えっ?!」

秘密ですよー、と前置きしてシーラさんが教えてくれた情報によると、バーナビー神官長の父親（公爵らしい）の弟がメリッサさんのお父さんで、妹がシーラさんのお母さんだということだ。

つまり、神官長とメリッサさん、シーラさんは血のつながった従兄妹。

「私が魔術師の才能があるって見抜いてくれたのはバーニーお兄様…、あ、バーナビー神官長なんですよー。ホラ私こんな性格でしょー?最初は家族にすら魔術師なんて無理だーって反対されたのを神官長が説得してくれたんですよー」

「へえ……神官長にそれほどまでに言わせるってシーラさん凄いですね。……で、「バーニーお兄様」って言うのは?」

私の言葉にシーラさんが慌てる。

「あ、あの一、私が言ったって言うことは内緒にしておいてくださいねー?バーニーというのはバーナビーの愛称なんですよー。でも、本人はその愛称で呼ばれるの恥ずかしいみたいですー。私は小さい頃からお兄様に懐いて可愛がってもらったので油断するとぽろっ
と出ちゃうんですー」

あわあわと言いつくシーラさんに神官長には言わないと約束する。

でも、バーニーねえ…。

よし、これから神官長のことは「ウサちゃん^{バーニー}」と心の中で呼ぼう!

そう思うと神官長から受けた数々のいやみも軽く受け流せるような気がした。

さて、メリッサさんから出された課題をクリアすると次の授業は私の好きな護身術だった。

元々体を動かすのは好きなので部屋にこもってばかりだとちょっと息が詰まってしまう。そんな私の護身術の先生は元親衛隊副隊長のヴァリーリアさん。

親衛隊は王室女性の警護を専門とする部隊で、隊員も全て女性なのが特徴だという。

メリッサさんは昨年までその副隊長を務めていたぐらいなので腕のほうは確かだ。

でも何で副隊長を辞めて侍女なんてやっているんだろうと不思議に思ってたずねてみたところなんというか、お約束の答えが返ってきてしまった。

「父が…、見合いの話を持ってきたのです」

「えーっと、それじゃヴァリーリアさんは結婚してるんですか？」

「ヴァレリアでいいですよ、サヤ様。親しいものは皆そう呼びますから。……………本来は父に従ってそうするべきだったのでしょうが…

…」

言葉を濁したヴァレリアさんだったが、よく見るとその拳がプルプルと震えている。

「見合い相手は家柄のみを目当てとした成り上がり男爵の次男坊で、正直言つて到底尊敬できるような人物ではありませんでした。それに何より私の誇りである親衛隊を「おままごと部隊」と馬鹿にしたのです。到底許せるものではありませんでした」

どうやら愛する部隊を馬鹿にされて切れたヴァレリアさんは見合い相手をぶちのめした拳句、勝手に縁談を断ってしまったらしい。

そのことに怒つたのが当然ヴァレリアさんの御父さんである侯爵閣下。

そしてなんと王妃様も親衛隊士の暴行事件に眉をひそめたというのだ。

王室女性専用部隊ということは当然そのトップにいるのは王妃様。その王妃様から「部隊の誇りを守るためとはいえ、非武装の人間を殴るのはいただけない」と謹慎処分を言い付かってしまった。

娘の不名誉に更に怒ってしまった侯爵閣下はヴァレリアさんを隊から除名させ、少しは大人しくなるようにと王宮の侍女にさせたということだ。

「誇りある親衛隊から籍を外されたことはショックでしたが、その結果あの馬鹿な見合い相手と結婚することも無く、サヤ様のお付になれたことは私にとって幸せなことです。それに今回の件が無事に終わった暁には隊に復職させていただけるとのお言葉を王妃様からいただいております」

激情を押さえ込み、私に向かって鮮やかな笑顔を向けたヴァレリアさんは強い人だと思う。
そんなヴァレリアさんを私は素直に尊敬した。

今時の侍女の必須スキル（後書き）

バーニー神官長の意外な血縁者が判明。メリッサやシーラあたりから昔話を聞きだして弱みをつかもつと爽香はちゃっかり考えていたりします。

爽香と愉快な旅の仲間たち。(前書き)

お気に入り登録が100名を越えました！ありがとうございます。
近いうちにお礼小話を書けるように頑張ります。

爽香と愉快的旅の仲間たち。

バーニー神官長が護衛を選んできるといつてから約一週間。

その間一度も顔を店に来ていない。

役職が忙しいのか、それとも護衛を選ぶので難航しているのかは知らないけど全くの音沙汰なしというのもどうなのかなあとちょっと気になっていた。

「サヤ様、よろしいでしょうか？」

一日の始まりはエレーナさんから「本日の学習スケジュール表」を貰うことから始まるのだが、今日に限っては授業が始まる前に声が掛かった。

「なんででしょうか？スケジュールに変更がありましたか？」

「はい。先ほどバーナビー神官長からご連絡がありまして、サヤ様の護衛が決定したので午後からご紹介したいのでお時間をいただきます」とのことです」

おー、ようやく決まったのかー。

もちろん私に異はなく、午後のお茶時間前の1時間ほどを顔合わせの時間としてとってもらった。

そしていよいよ旅の仲間たちとの対面である。

まあ、この時間を取るために今日の各種授業は全て15分ずつ切り上げるようになったが、授業内容自体は予定と寸分変わらなかった

のでかなりハードなものになったけど、それも気にならないほど楽しみだったからよいでしょう。

メリッサさんにお茶の支度をしてもらい、シーラさんとヴァレリアさんに手伝ってもらい着替えを済ませて待っていると時間ぴったりに部屋の扉がノックされた。

「どうぞお入り下さい」

ヴァレリアさんが神官長たちの来訪を告げたので私が許可するといつもと変わらないローブ姿のバーナビー神官長と、おお、久しぶりに見たアレックス王子も一緒だ。

他に軽鎧を着けた男性が二人と白いローブ姿の男性が一人入室して来た。

あれ？確か護衛の騎士が3人の魔術師が3人って言ってなかった？もしかしてまだ選抜メンバーが確定してないのかな？

私の表情を読んだようにバーナビー神官長がすつと膝をつけ一緒にやってきた男性三人も同じように膝をついた。

「サヤ殿におきましてはご機嫌麗しく。本日は「神」探索のためにご同行いたします護衛をご紹介しますいただきます」

流れるような口上と完璧なまでの礼に内心目を見張る。

おお、この人、本当に外面がいいのね…

「まずこちらの二人が武官として護衛を勤めさせていただきます」

紹介された一人眼の男性は濃いこげ茶の瞳に黒の瞳。とはいっても、光の加減薄墨のようなきらめきが見える20代前半に見える青年だった。

「お初にお目にかかります。グレイグ・ジェイスと申します。近衛隊第三小隊、隊員です。サヤ様の御身をこの命に代えてもお守りさせていただきます」

正式な礼をして深く頭をついたグレイグ青年に軽くうなずきを返す。(これもエレナさんから先に言われていたことで全ての紹介が終わってから声をかけるのがしきたりだそうだ)

続いて藍色の髪、同じ色の瞳の男性も同じように礼を取る。

「お初にお目にかかります。私はカーティス・バルム。近衛隊第二小隊副官を務めております。この度の重要なお役目、騎士の剣と魂に誓ってお仕えさせていただきます」

カーティスさんはどこからどう見ても「騎士!」というのを体現しているかのようにバツチリと決まったイケメンだった。うーん、きつとモてるんだらうなーとついつい思ってしまう。

「そしてこちらが魔術師として同行することになったギル・ノエルです」

バーナビー神官長に紹介されたのはうちの双子兄たちと同じ年ぐらいいに見えた青年だった。

「ギル・ノエルと申します。「神」の探索に同行できる行幸を感謝いたします。私に出来る範囲で精一杯お仕えさせていただきます」と

「思います」

そういうギルは金髪碧眼。典型的と言っていていいほどの美少年である。

「あれー、ギル君もサヤ様と一緒に行くのー？」

思わず感心してギル少年を見ていた私の後ろから素っ頓狂な声が上がる。

「ば、ばかつ！このような場でいきなり大声を上げるやつがいるかっ！」

「えー、でもわたしも一緒に行くんだよー？ギル君知らなかったでしょー？」

素っ頓狂な声の主はシーラさん。

同じ神殿に属する魔術師なので見識はあるだろうけど、それにしても随分仲がよさそうだ。

でもそれより気になるのはシーラさんも旅に同行してくれるの？

「そうですよー。わたしだけじゃなくてー、ヴァレリアさんやメリッサさんも一緒ですよー」

にこにこして教えてくれるシーラさんを隣に立つエレーナさんが額を抑えながら注意する。

「シーラ、おしゃべりがすぎますよ。ご紹介は私からと言っておいたはずですが」

「あ……、申し訳ありません……つい……」

「貴女のおしゃべりがこの先災いの元とならないようにしっかりと注意してくださいね」

「はい…とエレーナさんにしかられたシーラさんがしゅんとうなだれる。」

「サヤ様、先にシーラが話してしまいましたが、私のほうからも正式にご紹介させていただきます。サヤ様付の侍女としてメリッサとヴァリーリアを推薦いたします」

エレーナさんの言葉にメリッサさんとヴァレリアさんがうなずく。気心の知れた二人が付いて来てくれるのは私としてもとても嬉しいところだ。

「そしてシーラですが彼女は魔術師としての役でやはり同行させていただきます。この件に関してはバーナビー神官長の推薦でもございます」

シーラさんがにこにここと笑っているが、なんだろう、ギル君の機嫌があまりよくない気がしますよ…？

「そして最後に、私バーナビー・ルーンと」

「オレ、アレックス・エフェノールもついていくぞ」

はいい?!この国の神官長と第一王子様がくつついてくるってそんな豪華…もといお約束破りのパーティーってありなんでしょうか？

開いた口がふさがらないというのはこのことを言うんでしょうかね

え？

なんだか先が思いやられるパーティーになったようです。

いざ！出発の時

そして気が付いたらあつという間に「神」捜索隊の出発日が来てしまった。

とりあえず、何故かこの旅に参加しているアレックス王子とバーナビー神官長はお忍びという形で参加がなので、偽名を名乗ることになった。

「旅の間はただのアレクということで頼む。そうだな…身分はカイトイスと同じ近衛隊第2小隊の隊員だ」

「では私はバルナバで……」

「え？バーニーじゃないんですか？」

バーナビー神官長が申請した偽名を私は即座に却下する。バルナバなんて格好いい名前は許しませんのことよ？

ふふふ。と意味深に笑う私に神官長が苦虫をかんだような表情になる。

「いいんじゃないか？もともとバーニーは愛称なんだし、オレもその方が呼びやすい」

「わたしもですー！またバーニーお兄様って呼んでもいいですかっ！」

思ったとおりアレックス王子とシーラさんが援護射撃をしてくれる。

困ったような苦々しげな微妙な表情をする神官長を見るとここ一月の間にたまったストレスが解消される気がするのは何故だろうか。

「……………仕方ありませんね。アレク^{王子}にへたにぼろを出されるよりはマシでしょう。そしてシーラ、お兄様はやめなさい。いいですね？」

シーラさんはお兄様と呼ばせてもらえないのがちょっと不満そうだが大人しく引き下がった。

もちろんそんな掛け合いを見ていたほかのメンバーが笑いかみ殺していたの言うまでもない（笑）

旅立ちには陛下以下王宮の人たち全員から万歳三唱で送り出される……なんてことはなくてひっそりと慎ましかに行くことになった。

私としても目立ちたいわけじゃないので有難い限りなのだが、この国の命運（？）をかけての探索のはずなのにこんなに地味なのでよいだろうか？？

そう疑問に思っただのは私だけではなかったようでヴァレリアさんが馬車の隣で馬を並べていたカーティスに声をかけていた。

「質問をしても良いだろうか？カーティス殿？」

「私にわかることであれば何なりと」

「出発を秘密裏に行うということは何か気にかかることがあるので

はないか？」

そう、出発には2頭立ての馬車が2台と馬が3頭。旅の荷物を詰め込んでみた。これだけというのはこう、なんというか、かなり質素だと思う。

言い換えればたったこれだけだからこそいざとなったら荷物を1台にまとめて移動できる機動性があるということか。

「流石は元親衛隊副隊長殿。やはり気づいておられましたか。……どこの国にも耳聡いものがあるようでサヤ様のご出発自体を妨害しようとするものがおりましてな。一応そちらは何とかいたしました。が念には念を入れてということですよ。」

カーティスの言葉にヴァレリアの眉間に皺がよる。美人は鬨め面をしても迫力ある美人にしかならないんだなーとちょっと感心してしまった。そんな場合じゃないのにな。

「それならある程度までこのまま進んだらその後は全員もしくは馬車を1台に減らして、パーティーを二つに分けた方が更に欺きやすくなるんじゃないですか？」

ヴァレリアさんと一緒に馬車に乗っていた私が提案するとカーティスはもちろん馬車のたずなを握っていたバーニー神官長も驚いた顔をした。

「何故その案をご存知なのですか？」

振り返って驚いた声を上げたバーニー神官長だが、わき見運転は危険だから前を向いてください、前を！

車と違って馬は急ハンドルで曲がるわけじゃないからとりあえずまっすぐ歩いてくれるけどここはまだ城下町を完全に抜けたわけじゃないからそれなりに人通りもある。

急に人が飛び出してきて撥ねたりしたら大変だからたずなを握っている時はよそ見しないで欲しいです。

「別に案を知っていたわけじゃないですよ？ただ、そんな事情であればなるべく怪しまれない状態にしたほうがいいと思っただけです」

「さすがはサヤ様。ご慧眼感服いたしました」

馬上からもスマートな礼を取るカーティスだが、これってやっぱり問題だよねえ…。

私の考えには気づかないカーティスたちに内心で唸る。

うん、今夜の宿に着いたら改めて全員集合させて一言いっておこう。

そして第一日目の宿泊。

場所は王都から東に5ファロン（1ファロン＝約1km）ほど離れた場所にあるあまり大きくない街だった。

その中でも割と上等な分類に入るのであるう宿を今夜の宿と決めると魔術師組みは街にある神殿へ向かい「神」に対する新たな情報が入っていないか確認にいくことに。

騎士組みは宿の周囲の安全確認とこれからのたびに必要なものを追加で買いに行った。

残された私とメリッサさん、ヴァレリアさんは宿でお風呂を借りることにした。

(ちなみに王子は嬉々として騎士組みと一緒に買い物に出かけた)

「気持ちいいね」

「本当ですわねえ。乗っているだけとはいえ、やっぱり体が痛くなりますわ」

「同感。普段馬車なんて乗り付けないからやっぱり疲れるよ」

3人揃って宿のお風呂(なんと温泉だった!)に浸かったのんびりと体の凝りをほぐしていると脱衣所に人の気配がした。

この時間、浴場は私達が貸切にしてもらっているので他の人がはいってくることはないはずなのだ。

わずかな物音に真っ先に反応したのはやはりヴァレリアさん。ざっと湯船から立ち上がるとタオルを体に巻きつけ油断なく身構える。

メリッサさんも私の前にすっと移動してきてさりげなくかばってくれる。

だが、飛び込んできたのはシーラさんだった。

「みんなずるいですー！わたしが出かけてる間にお風呂入るなんてー！わたしもいれてくださーい！」

ばーんと登場したその姿に先に入っていたメンバーが思いつきり脱力したのはいうまでもない。

まあ、その後はシーラさんも含めて4人でキャツキヤウフフとガールズトークを楽しみ婿とが出来たので良いとしますか。

お風呂から出た後はお楽しみの夕食。

この宿はごたぶんには洩れず、1階が食堂、2階が宿という造りで、食堂に女性陣が移動したときには男性陣が先に席についていた。

「みんな遅いぞー。こっちは先にはじめてるからなー」

クレイグの声に見やれば確かに男性陣のテーブルには酒とつまみが並んでいる。

もう一杯やってるとは早いなあ。

私たちも席に着くと今日のお薦めメニューと飲み物を頼む。

この世界では16歳から成人とみなされているし、アルコールに対して年齢規制はない。なので私が飲んでも文句は誰からも言われませんが、それでも私はノンアルコールの飲み物を頼んだ。

「何だ、サヤ様は飲めないのかい？」

「あー、いえ、飲めないわけではないのですが、まあ色々ありましてなるべく飲まないようにしているんです」

クレイグの絡みをさらりと流したが、お酒に関しては良い思い出が少ないので飲まないことにしたのは無いでしょう。

いざー！出発の時（後書き）

長くなったので分割します。

旅の心得は誰のため？

「我らの旅立ちにかんぱーい！」

完全に出来上がっているらしいクレイグのノリについていってるのはアレク王子。

カーティスさんは同じ騎士の繋がりでか苦笑いしながらも付き合っている。

ギル君とバーニー神官長は無視するのも悪いけど、付き合いたくないという表情でお愛想程度に杯を掲げる。

女性陣のテーブルでは楽しいこと大好きなシーラさんがやはりノリノリで「かんぱーい！」と言っているし、ヴァレリアさんも笑いながら掲げている。

メリッサさんもあきれた顔をしながらもちゃんと付き合うあたり義理堅いというか。

もちろん私もちゃんと乾杯をした。

夕飯のメニューは干し葡萄を練りこんだ柔らかいパンと野菜と鶏肉（？）のシンプルなスープ、キノコと魚介類の煮込み、メインはまるごと一匹の白身のお魚がどーんと揚げられてあっさりとした餡がかかったものだった。

他にも付け合せの茹でた野菜やデザートとして出た果物のコンポートなどどれもこれもとても美味しかった。

みんなが満足するまで食べたあと、全員に話をしたかったので改めて部屋に集まってもらった。

「疲れているのに集まってもらってごめんなさい」

「いえ、御気になさらず。食堂でなくわざわざ全員を集めて話をするとすることはなにか大切な理由があるのでしょうかから」

今回はバーニー神官長の言葉にも嫌味は感じられない。

多分、昼間馬車の中で言った案を聞きたいせいかもしれないけど。

「回りくどくいうのは好きではないので率直に提案したいと思います。今回の旅の間私たちは全員が大切な仲間だと思っています。ですから私に対して過剰な敬語などを使うのをやめてもらいたいと思います」

私の言葉に男性陣が皆目を見張る。

ちなみに女性陣には既に過剰な敬語はやめてもらっている。

「あと、様付けもやめませんか？どう見ても年下の者に様付けをしている姿は怪しく見えると思うのですが？」

「いえ、この世界では幼くても主家の方々に対して仕える者が様付けでお呼びするのは当然です。故にサヤ様に対しての言葉遣いを怪しまれることは無いと思いますが？」

「確かに階級制度が通じる場所ならその通りだと思います。ですがこれから私たちが向かうのは社交界ではなく、庶民が多く暮らす場所です。そんな場所に様付けをされるような身分の方がお供を引き連れて人探しというのはかなり目立つのではないのでしょうか？」

カーティスの意見も最もだと思うが、目立たないことが第一ならば今のみんなの私に対する態度はまずいと思う。

「木を隠すなら森の中ともいいますしね。私はサヤ様…いえ、サヤの意見に賛成ですわ」

真つ先に賛成してくれたのはなんとメリッサ。

うん、自分で敬称云々言ったのだし、この際みんな親しく呼んでしまおう。

「俺も賛成ー。敬語ももちろん使えるけど、これからの長い旅の中でずっとそう話してたら気が詰まっちゃうもんな」

クレイグも片手を挙げて賛成してくれる。

「私も異存はない。ああ、でも私のこの話し方は既にクセとなっているからそれだけは許して欲しい」

「わたしも問題ないです」

これで女性陣は全てクリア。残るは堅物男性陣ばかりだ。

「オレも構わんど。王子休業中だからな、皆気軽にアレクと呼んでくれ」

王子様家業から解放されたのがよっぽど嬉しいのかアレクもにこにこしている。

もしかしてアレクが探索に参加したのって王子様家業から逃げたかっただけじゃないのかなあ…？

そんな疑いを思わず持ってしまっただけアレクは楽しそうに見えた。

「あ…、皆さんがそうおっしやるなら。そう直ぐに崩すことは出来

ないと思いますが、精一杯頑張ります…その、サヤ」

ギル君（どうしても彼の印象から君付けしなくなってしまうのよね）も戸惑いながらもみんなの意見に反対はしなかった。

「……………はあ。確かに正論だと思います。それにここで反対しても誰も賛同はしなさそうですからね。貴女のいうとおりにしましょう、サヤ」

バーニーも折れたこと（というか、これで堂々とバーニーと呼べるのが楽しみで仕方ないのだが）旅の間は身分は考えないことになったのであった。

そして昼間馬車の中で私が提案し、アレクやカーティスたちも考えていた案について皆で話を詰めることになった。

チエックインした後にバーニーたち魔術師組みが神殿経由で「神」の情報を集めた結果、「神」らしき存在はエフェノリアではなく東の大国アスフェンに現れたらしいとの噂が広まっているようだ。

これはあくまで噂なのですが、とバーニーが前置きして教えてくれた情報によると、「神」が現れたときにアスフェンにて季節外れの雪が降ったそうだ。

元々アスフェンは四季が比較的はつきり分かれていてその季節季節に合わせた作物を作り酪農で栄えている国だ。

今の時期は春から夏に切り替わる頃なのでこんな時期に雪が舞うな

んて通常では考えられない。
これは「神」が降臨した印なのではないか。とそういわれているそ
うだ。

「うーん、手がかりとしては弱い気もするけどとりあえず情報がそ
れしかないみたいだしまずはアスフェン目指していきましょうか。
その途中でもっと具体的な情報が拾えるかもだし」

私の決定にみんな異存はないみたい。
まあ、他に進む決定打もないしね。

「それから国境を越える前にこのパーティーを二つに分けたいと思
います。馬車は一台、馬での移動で持ちきれない荷物を積み込みた
いと思います」

「待って、バーニー。馬での移動で持ちきれない荷物って何？」

私の質問はカーティスが代わりに答えた。

「女性陣の着替えは必要だろう？それに場所によっては宿が取れな
い恐れもある。その時の臨時の寝場所でもある」

「それは本当に必要？私たちは旅に出ると決めたときから不便は覚
悟の上。野宿となっても魔術師のみんなが張ってくれる結界で危険
は避けられるのじゃない？」

その言葉に女性陣はうなづく。

「だったら馬車は不要だと思う。各人が必要なものだけ持って、ど
うしても足りなければ途中で補充、臨時の場合は仲間内で貸し借り

すれば問題はないでしょう」

言い切った私にカーティスは目を見張り、そのあとバーニーを見る。

「そうサヤは言っていますが、どうしますか？アレク、バーニー？」

「その方が効率的だとは思いますが、サヤは馬に乗れるのか？」

アレクの言葉に頷く。

伊達に馬術ライセンス2級は持ってませんよ？

自信満々の私にあきれた様に肩をすくめるとアレクはバーニーに言う。

「サヤが言うんだ。国境を越えるときには全員が騎馬に移動しよう。それでいいな？」

「……わかりました。では国境を越えるまでは馬車と騎馬で。表向きは貴族の旅行に見せかけましょう。その後は厳しい旅になると思いますが、全員それなりに覚悟して置いてください」

バーニーの言葉に全員が重々しく頷いた。

はじめての たたかい（前書き）

今回本文中に残酷な描写があります。だめな方は飛ばしてお読みいただくことをお薦めします。

はじめての たたかい

とりあえず、エフェノリアの国境までは恙無く移動できた。

国境の検問所ではバーニーが用意した全員分の出国許可証と身分証明書（アレクとバーニーと私の身分は偽造だけど、国王陛下の印があるので証明書としては本物）を見せることでこちらも問題なく出国できた。

そしてここからが探索本番ということ、まずは最寄の街にて馬車を手放し必要人数分の馬を入手した。

しかし以外だったのはメリッサやシーラまでもが乗馬の腕がかなり良かったことだ。

逆にちょっと怪しいのがギル。

もちろん人並みには乗れるのだが、なまじ他のメンバーの腕が立つからかぎこちなさが目立ってしまうのだ。

「ギル君あいかかわらず苦手そうだねー。わたしが一緒に乗ってあげようかー？」

「う、うるさいっ！別に一人でも大丈夫だっ！」

シーラとしてはからかうつもりとかではなく純粹な好意で言ったのだろうけど、ギルにとってはまあ屈辱だろうねえ…。

真っ赤になって言い返す姿を大人達は生ぬるい笑顔で見守っていたのがなんだかおかしかった。

アスフェンに入ってからの行動としてはまず王都を目指しながら各街にて情報収集。

でもそう簡単に「神」の情報が落ちてくるわけではないので空振りも多い。

それでもめげずになるべく人の多い街に立ち寄って地味な聞き込みを繰り返していた。

そんな中、ちよつと気になる噂を耳にした。

なんでも「神」がアスフェンに降臨したとの噂が各国に広がったせいでかなりの数の搜索隊が現在この国にいるということ。

それから、その搜索隊同士が鉢合わせした場合はなんと潰しあいになつているというのだ。

「おい、バーニー。他の搜索隊とであつた場合うちはどんな対応をするつもりなんだ？」

次の街へ続く森の中の本道を並足で歩きながらアレクが問いかける。

この道は近道なのだがあまり幅が広くないから全員が警戒しながらの移動でもある。

「まあ、できれば穩便に済ませたいところですね。なるべく無駄な殺生はしたくないですし」

そう言つて私たち女性陣をちらりと見たからバーニーなりに気を使つているのだろう。

「オレもその意見には賛成だけどな。でも、問答無用でかかつてきた時は、しょうがないよなっ！」

アレクは言葉と同時に飛んできた矢を剣で叩き落す。

続いて飛来する複数の矢はクレイグとカーティスが同じように叩き落した。

「ギルツ！シーラツ！」

「はいっ！」

「はい」

バーニーの声にギルとシーラが素早く防御結界を張る。

「この結界からでないでくださいね。だいじょーぶですー、バーニーとアレクはすつごく強いんですよー」

女性陣を守る結界を張ったシーラがいつも通りののほほんとした口調で請合う。

森から急襲をかけてきた集団は体格のよい男ばかり20〜30人というところだろうか。

見た感じ探索のために組まれたパーティーというよりは単なる山賊かゴロツキにしか見えないのだけど…。

「こんなところを身なりのいいお貴族様が通るなんてなあ。ちよつと俺らにもおこぼれ分けてもらえないかねえ？」

にやにやと笑いながら一人が言えば他の男どもも同じような下卑た声を上げる。

ああ、なんか見てるだけでムカムカするヤツラねえ…
こんな知性の欠片も感じられない話し方をするやつは大嫌いだ。

それでも一生懸命爆発しそうな感情を抑えている私の地雷スイッチを男は見事に踏み抜いてしまった。

「とりあえず有り金と、その女どもを置いていってもらおうか。4人とも見てくれはいいから俺らが味見したあと高く売っばらってやるよ」

ブチッ

それは誰の切れた音だったか。

敵は全員が徒歩だけど何かしらの武器を持っている。

それに対してこちらは前衛が3人。(ヴァレリアも戦えるけど、彼女は最終防衛ラインなので通常は戦闘に参加しないと前もって決めてある)

魔法使い3人は肉弾戦には向いていないのであくまで遠距離攻撃もしくはサポートが中心。

パーティの半分が女子供と侮りきった男たちは真正面からバカ正直に突っ込んできた。

「風の戒め。逃れることは許さない」

シーラの作った結界の中心で立ちあがった私はまっすぐに突っ込んでくる男たちを見据えて呟く。

その途端男たちは何かに足を取られたかのように次々と転ぶ。ぎりぎり不可視の戒めに囚われた男たちは立ち上がるうとも指一本動かすことは出来ない。

「天よりの雷。己が罪を悔いよ」

何もなかった空から稲妻が囚われた男たちの脇に行く筋も突き立つ。天よりの無数の光の矢は唯一つとして直撃するものはなかったが、それ故に男たちにとっては恐怖を倍増させることになった。

風に囚われた男どもを前衛組み3人が迷いもなく近づき確実に昏倒させていく。

バーニーも事態の異様さに逃げ出した男を捕縛の魔法で捕らえ引きずり出す。

短時間で仲間のほとんどを失った男は哀れなほど真つ青な顔をしていたが、女性陣を侮辱された男性陣に容赦と言う文字はなかったようだ。

「バーニー、こいつだけは許せない。殺ってもいいよな？」

捕縛魔法で動けないにもかかわらず、クレイグがその腕を更にひねり上げて地面に膝をつかせた男は良く見れば最初に暴言を吐いた男だった。

許可さえあれば直ぐに切り捨ててやるとばかりに剣を男の首筋に当てれば男は見苦しいまでの命乞いを始める。

「た、たすけてくれえ！もう悪いことはしねえ！神に誓ってしねえ！だから…」

「黙りなさい。その舌はこちらの質問に答えるときのみ動かしなさい」

ぴしゃりと言い切ったバーニーの声に男の良く回る舌が止まった。

おお、バーニー、相当怒ってるようですね。

バーニーの考えてることが大体わかる私は止めることもせずただ見守ることにした。

「こちらの質問は二つ。まず、お前の知っている「神」についての情報を全て正直に話しなさい」

「言う！言うから命だけはっ！」「神」はアスフェンこの国の北のほうに現れたって噂だ！あんたらみたいなのヤツラが北に移動してっただから信憑性はあると思うっ！」

「…チツ、どうやら出遅れてしまったようですね。何か考えなければなりませんか……。では二つ目の質問です。何故私たちを襲ったのですか？」

「俺たちは雇われただけだっ！今日この道をいく黒髪くろかみの女を連れたパーティーを痛めつけるって！くそう…騙されたぜ！何が女子供中心の弱いパーティーだよ！今度あったらあの赤毛の女、ぶち殺…」

途中から逆切れをし始めた男の言葉が急に途切れ、不思議そうな顔になる。

「え…？あ…？な、に…？」

不自然な体勢ながら己の腹を見た男はそこにあるはずのないモノを見つけた。

「手……………？」

誰のものかわからない眩きが洩れた。

男の腹から生えているのは白く細い腕。

でも、背中側にいるクレイグの手は剣と男の手をねじり上げているから彼の手ではない。

私たちの見つめる中で「手」は握ったり開いたりを数度繰り返した後、何かをひねり潰すような仕草をして唐突に消えた。

後に残ったのは腹の傷など見当たらない男の死体が一つだった。

はじめての たたかい（後書き）

爽香の言霊が発動しました。そして想像するとグロい部分があったことお詫びします。

「わらわはまじい」(前書き)

遅くなつてすみませんでした。>> ようやく続きマップです。

「わいとおもつこと」

あまりに異常な死体に誰も言葉がなかった。

男をつかんでいたクレイグの腕から力が抜けたのかずりりと倒れた男には血溜まりすら見当たらない。でも確かに私たちは見た、と思う。男の腹から生えた白い腕を。

「バ、バーニー様？い、今のはいったい…？」

真つ青な顔をしたギルが顔色ひとつ変えていないように見えるバーニーに声をかける。

「…クレイグ、その男をひっくり返すのを手伝ってください。アレク様も手伝ってください」

「あ、ああ。わかった」

男三人で死体をひっくり返している間にカーティスとギルが私を含めた女性陣を道を少し戻ったところにあつた空き地にまで連れて行ってくれた。

「…ヴァレリア、大丈夫？」

「え、ええ。…大丈夫、死体を見たのは初めてではないし。ただ、あんなのは初めてだったのでつい動揺しただけ。それよりもサヤのほうは大丈夫なの？顔色が真つ青よ？」

「うん…ごめん、ちょっと休んでいい？さすがにいろいろときつい…」

ヴァレリアに指摘されたとおり、自分でも血の気が引いていたのはわかっていた。

ひとつはもちろん先ほどの男の死体。

幸か不幸か16年生きてきて私は身近な人の死に立ち会ったことはなかった。

祖父母は父方、母方ともに元気に存命しているし、曾祖父や曾祖母も田舎でかくしやく豊饒かとしていたのでまだお葬式に参加したことすらなかった。

だから人の死体というのを見たのは生まれて初めて。

ドラマや映画の中ではいくつも見た『動かない人間もの』がこれほどの恐怖を覚えるものだとは思わなかった。

それでも私が卒倒しなかったのはある意味現実感がなさ過ぎたせいなのかもしれない。

まるでホラー漫画か映画のように作り物っぽい腕が生えてその痕跡すら残さずに消えるなんて、そんなのあるわけがない。

そう思い込みたかった。

「サヤ、これ飲んで。少しは温まると思うわ」

声をかけられて顔を上げるとやはり同じように青い顔をしたメリッサが木でできたカップを持ってきてくれていた。

カップから立ち上る香りはすっきりとしたハーブの香りと甘い蜜の匂い。

「ありがとう、メリッサ。……うん、おいしい…」

季節は初夏に向かいつつある時期だからホットの飲み物など普通なら熱くて飲む気にもならないだろうけど、さすがに今はかりは誰も何も言わずに温かい飲み物で芯から冷えてしまった気持ちを暖めていたようだ。

まもなくバーニーとアレク、クレイグも空き地に戻ってきたけどやつぱりみんなの顔色も悪かった。

メリッサとシーラが熱いハーブティーを渡すと、三人ともその場に座り込んで大きなため息をついた。

「いやー、参りました。原因も手がかりもなーんもなし！とりあえず先に気絶させた他のやつらは改めてバーニー様の魔法で縛りなおして道の端にまとめて転がしておいたので次の街で役所に届ければ適当に処分してくれると思います。ただ、あの男だけは説明を求められても困るので俺たちで処理しました」

おどけたように明るく言うクレイグだったがその内容ゆえか場を和ませることはうまくいかなかったみたいだ。

「さっき件に関しては皆、他言無用で頼む。もう少し休んだら出発する。ゆっくり休ませてやりたいが、逆にここは危険だと思うから一気に次の街まで移動して宿を取ろうと思う」

アレクの指示に全員が頷き、火のそばにいたメリッサとシーラが火の始末を始めた。

「サヤ」

アレクの声に振り返るといつの間にか近づいていたアレクが私の隣に座った。

「すまない。危険な目にあわせるつもりはなかったのだが…」

「別にアレクのせいじゃないでしょ？最初にあいつらの気配に気づいたのはアレクだったし。…それに多分、旅を続けていれば同じようなことがまたあるだろうし…。戦いになって誰かが傷ついたり、その結果誰かが犠牲になることだってありえないわけじゃない」

「だが、お前はオレが守る。約束する」

「……それは、うれしいけど、私は仲間の誰も失いたくない。だから自分と他のみんなも守るって言うべきだと思うよ」

「………わかった。誰一人かけることなく「神」を見つけ出した後はエフェノリアに帰ろう」

なんとなくアレクが凹んだ気がしたけど、私としてはみんなが無事に国に帰れることのほうが大事だ。

もちろん、私と省吾さんが一緒に元の世界に帰ることも含めて。

「さあ、みなさん日が暮れる前に街に着きたいので出発しましょう」

バーニーの声に各自自分の馬に乗ると一気に森の中の道を駆け抜けた。

急いで森を抜けたおかげで日が暮れるまでにはだいぶ余裕を持って次の街に着くことができた。

今日の宿はさっきの襲撃を警戒していつもより少しランクの高いところを選んだみいだった。

宿代＝警備の充実度というのがこの世界の基本的な仕組みだというのは城を出る前に教えてもらっていたから今日の宿を見たとき思わず感心した声が出てしまった。

「うわー、今日はだいぶ奮発したんだねー」

「先ほどの一件がありますからね。バーニー様が今日だけは、とおっしゃってましたよ」

ヴァレリアが苦笑しながら言ったとおりこのパーティーのお財布はバーニーが握っている。

もちろん、先行して宿の目星をつけてくるのはクレイグかカーティスなのだが実際に宿代を交渉してしつかりまけさせている姿は何度も目にしていた。

というか、その儉約精神は私にもおなじみのものなので実はひそかに交渉時には後ろから応援していたりする。

そんなバーニーが交渉すらししないで決めたくらいなので今日の宿は警備体制はばっちりだし、お風呂もご飯もとても豪華で、みんな昼間にあった一件をとりあえず忘れるぐらい安心してくつろいだのだった。

「わいとおもつこと」(後書き)

活動報告にも書きましたがおまけ小話集を新しく作りました。まずはお気に入り登録者数100名突破記念&バレンタインの小話です。爽香のお兄ちゃん・sも出てきます。よろしければそちらもお楽しみください。

魔法？いいえ、違います。(前書き)

長くなったので分割しました。何でこう説明的な文章になるのか
本人にも謎です・・・orz

魔法？いいえ、違います。

久しぶりに何も考えず泥のように眠った翌日。

今日は一日休息日に当てる、出発は明日にするということだったの
で私を含めてほとんどの人が寝坊気味の時間に起きて食堂に集合し
た。

「おはようございます、サヤ。だいぶお疲れだったようですね」

「あ。おはようございます、カーティス。遅くなつてすみません」

「いえいえ。まだ起きてこない人もいますから大丈夫ですよ」

笑つて言ったカーティスの言葉どおりまだ全員の姿は見えていない
というか、食堂にいたのはカーティスとメリッサ、シーラの3人だ
けだった。

「あれ？他のみんなはもしかしてまだ寝てるの？」

「ちがいますー。バーニー様は神殿に出かけてますー。もうすぐ帰
つてくる予定ですよ。ヴァレリアさんはギル君を連れて買い物です
ー。こつちもそろそろ帰つてくると思いますよー？」

その言葉どおりのタイミングでバーニーとヴァレリア&ギルが戻っ
てきた。

「只今戻りました」

「おかえりなさいー」

3人が椅子に座るとほぼ同時に気を利かせたメリッサの注文していたお茶がテーブルに運ばれてくる。

「バーニー、出かけていたけど、何か新しいことでもわかったの？」

「いいえ。特には。今朝は別件で神殿に出かけましたので。そのことについて食後にお時間をいただけますでしょうか？」

「……いいですけど？」

「ありがとうございます。……ところで、二人足りないようですがどうしたのでしょうか？」

「あー、アレク様とクレイグなら……」

「おはよーござーっす〜」

カーティスの言葉をさえぎるようにのんきな挨拶をしながらクレイグがようやく食堂に下りてきた。

「おはようという時間ではない気がしますが？騎士たるものがそのように弛んだ生活でよいと思っっているのですか？」

起き抜けのクレイグとしては席に着くかつかないかのタイミングで始まったバーニーのお説教も右から左に抜けてしまっているようだ。

「朝から元気ですねえ…バーニー様。せっかくの美味しいお茶が冷めますから先に飲みましょうよー。どうせまだアレク様も寝てるんですし」

それを聞いたとたんバーニーの顔色が変わった。

「……………まだ寝てらっしゃるんですか、あの人は……………！」

背後にゴゴゴゴゴゴと書き文字が見えそうな勢いのバーニーがカタ
ンと椅子から立ち上がった。

ちょっと失礼します、と言いおいてバーニーが食堂を出て行ってし
ばらくした後。

頭にでつかいたんこぶを作ったアレクが食堂に下りてきたが、誰も
たんこぶそれについては言及しなかったのは仲間としての優しさだと私
は思っただけだね？

全員揃って朝食を食べた後、バーニーとアレクが泊まっている部屋
に全員が集まった。

幸いにしてこの宿自体が一部屋ごとの部屋を広く取っているし、こ
の部屋は二間続きなので、9人の大所帯でも入りきることができ
た。

「それで、全員集めてのお話って何ですか？」

私に時間をとってほしいと言って、食堂ではなくわざわざ部屋に戻
った上で全員を集めて話をするというのだから相当重要なことなん
だろう。

私に聞かれたバーニーはまず部屋全体に防音の結界を張って中の音
が外部に漏れないようにする。

ここまでするってことはなんだかやばいぐらいの話なのだろうか？

「わざわざ多重結界張ってまで音漏れを防止するなんてずいぶんと気合が入ってるが、そんなに機密事項なのか？」

たんこぶを冷やしつつ言うアレクの姿は正視しないようにするみんなも同じ疑問は持っていたようだった。

「そうですね。ある意味機密事項だと思います。まず確認しますが、昨日の一件で盗賊を捕らえた魔法は誰が使ったか皆覚えてますか？」

「バーニーじゃないよな？捕縛の詠唱や魔法の波動は感じられなかったぞ？」

「僕も使ってません。シーラと防御魔法にかかりきりでしたから」

「わたしも使ってませんよー。あー、でもあの時サヤが何か呟いた気はしますけど……」

「あら、でも同じ結界内にいた私たちにも魔法特有の発動波動は感じられませんでしたわ。ヴァレリアも感じなかったでしょう？」

「ええ。だけど、男たちが一斉に動きを止めたのは間違いない。それはみんなも目撃してるんだし」

「その上あんなにいい天気だったのにいきなり複数の落雷があったぜ？それも意図して狙いを少しずらしたかのようにあいつらの脇に落ちた」

「盗賊にしてみれば動けないところに追い討ちですからね。ただ捕まえた中に魔術士もいましたがその者たちも誰一人として戒めを解

けなかったのは確かに気になるところですね」

全員に一通り意見を述べさせた後、バーニーが話し出した。

「私もあの時魔法発動波動はまったく感じませんでした。感じたのは純粋な力と圧倒的な意思。この世界において魔法が発動するときには必ず波が生じます。その波を作らずに魔法が発動させることなどできるはずがないのです」

一度言葉を切ったバーニーがひた、と私をまっすぐに見つめている。別に悪いことをしたわけじゃないのになんだか背中がむずむずするような気がして居心地が悪いなあ。

「この街の神殿を経由して北の総本山に訪ねました。『魔法発動波動なしで魔法を使える存在はいるか?』と。その回答は『神および神の眷属のみ使うことができる』とのことでした。…サヤ、あなたは昨日いったい何をしたんですか?」

何をした、と聞かれても困る。

だって私は魔法なんて使えない。というか、日本人のほとんどは魔法なんてものは使えないだろう。

もしかしたらこの世界に呼ばれたときに「特別な力」とやらをおまけでつけてもらえたのかもしれないけど、本能的に自覚がないからなんともいえない。

ただ、ふざけるな!と思ったのは確かだ。あいつらは私たちを慰み者にした拳句に売り飛ばすと堂々と言つてのけたのだから。

だから前に一の兄と三の兄教えてもらったとおり『言葉』に強い意思を込めた。

『ことわざ集』
『言霊』

一の兄りょうちゃんが大学で研究している世界各地の古代言語においても言葉が力を持つと考えている人々がいたことはわかっている。

三の兄せーちゃんが趣味で調べていた言霊信仰は日本に古くから伝わっている。

『人の口から出た言葉は意味を持ち、力を持つ。だから悪い言葉はなるべく使わないようにね?』

『強い言葉は強い意思を持つ。逆に強い意志を持って口にした言葉は力を持つ。さーやなら意味はわかるね?』

兄たちの忠告に従い今まで悪い言葉は気をつけて言わないようになってきた。

でも、昨日の男たちは今まで生きてきた中で初めて許せないと思っ

た。私だけでなく、みんなを貶めることを言ったのだから。

だから初めて『言葉』に『強い意思』をのせて言ったのだ。

アナタハ「コトダマ」ヲシンジマスカア〜？（前書き）

言霊の定義は詳しく調べてません（汗）違ってた場合でも鋭すぎる
突っ込みはご容赦ください…

アナタハ「コトダマ」ヲシンジマスカア〜？

「……………私のいた場所には『ことば言霊』という考えがあつてね、簡単に言えば言葉には意味があり、意思がある。悪い言葉を口にすれば災いが、良い言葉を口にすれば善いことが起きると言つものなの」

私の言葉にみんなが耳をそばだてる。

「あの時、私はみんなを侮辱したあいつらが許せなかったから、許さないと言つ意思を籠めて束縛と脅しの言葉を言つただけど…。まさかあんなことが起こるとは思わなかつたな〜」

苦笑いをする私に誰も何も言わなかつた。

しばらくしてから言葉を発したのはアレクだった。

「それじゃやっぱり魔法とコトダマとやらは別物なんだな？だとしたらそれを操れるサヤは神もしくは神の眷属と言つことか…」

「まあ、もともと異世界からの召還者ですしね。勇者とならなければ巫女姫として神殿にて神への祈りを捧げて国の礎となるだけの力を持つているはずですから。神の眷属と言われても私は納得しますよ」

バーニーは私のとんでもないらしい能力に呆れたように肩を竦める。

「それじゃサヤって何か言つたらそれが本当になるってことですか〜？」

「それだつたらさ、もっとこ馳走が食いてえ〜とか言つたらぼんっ

と目の前に出てくるとか?!」

シィラとクレイグの言葉にそれはいくらなんでもないだろうと全員
の呆れた視線が刺さる。

「さすがにそれはないと思うよ?というか、そんなことがあったら
今頃私は省吾さんと一緒に元の世界に帰ってるって」

「そうですね。第一、口にした言葉がすべて現実になるならすでに
みんな異常に気がついていたでしょう?...しかしそうなるとコトダ
マというものの発動には何らかの一定条件が必要と言つことではし
ょうか?」

うーんと考え込むバーニーに釣られて他のみんなも考えてるけど、
私にしてみれば異世界に召還されて初めてのチート能力にちょっと
浮かれ気味だった。

だってねえ?どんなお話だって異世界に召還された主人公って何ら
かの特別な能力をもらってバリバリ活躍するじゃない?

でも、今まで私はそんな不思議能力をもらった記憶もないし、使っ
たこともない。

せっかくもらったらしい言霊の能力、どこまでそれが使えるのか後
でこっそり試してみようと決めた。

あー、それにしてもこんなことならもうちょっとお兄ちゃんたちに
詳しい状況を聞いて来ればよかったなあ。

すぐに戻れないにしろ、頼りになるあの兄たちの意見が聞ければいい
のに...。と、思つてふと気づいたことがあった。

「どちらにしろ、サヤにコトダマの能力ちからがあることはわかったが、その能力は未知数だ。それに世界の理から外れた能力があることを他の者に知られることはよくないだろう」

考えていてもこれといったはつきりしたことがわからないので場が暗くなりかけたが、その雰囲気を断ち切ったのはやはり（一応とはいえ）王子様のアレクだった。

「サヤの能力ちからについてはもちろん他言無用。サヤもむやみやたらと発動させないように気をつけてくれ」

気をつけるといわれても何がきっかけて発動するのかわからないんだけどねえ…。

それでも素直に頷く。

「これ以上ここで頭を突き合わせても何も出ないと思うが？今日は久々の休日なのだしそろそろ解散してもいいんじゃないのか？」

そうアレクがバーニーに伝えると同意したバーニーが結界を解いた。

「そうですね。では、このあとは自由行動としましょうか。皆さん、なにか街で情報を仕入れた場合は夕食時に報告を。出発は明朝、日の出のころです。くれぐれも寝坊しないように」

最後の部分で視線がアレクとクレイグに向いていた気がするのはいさじいさじゃないと思う。

まあ、アレクが意外と寝穢いぎたないのは実は城にいたころこっそりエレナさんに聞いていたから知ってたけど。

それでも旅の間はちゃんと起きて行動してたんだけどなー。やっぱり久しぶりの休日ってことで気が抜けてたんだらうか？

兎にも角にもとりあえず一時解散となったのでみんな街に出かけた
り部屋に戻ったりするようだった。

「サヤはこの後どうします？ 私たちは朝ヴァレリアが見つけたお店
を見に行くことにしますけど？」

「んー、ごめんね。 もうちょっと部屋でのんびりしたいかな。 みん
な楽しんできてね」

「そうですか？ 宿にはカーティス殿とギル様が残るそうですから何
もないとは思いますが、もしお出かけされるのでしたらお二人と一
緒に行動してくださいね？」

心配そうに言うメリッサに了解を伝えると私は女性陣3人が出かけ
るのを見送った。

「さて、それじゃ作りますかー」

3人の姿が部屋の窓からも見えなくなつたのを確認してから私は自
分の荷物をごそごそと漁り、必要な材料を机の上に並べる。

取り出したのは召還される直前に秋葉原で購入した鉱石ラジオのキ
ット。

コイルを作るために銅線をかなりの数巻かなければならないけど、
今日は時間もあるし作業自体難しいものではないのでリズムカルに
巻いていく。

うーん、今日もいい天気だなあ。 これだけ晴れていれば多分大丈夫
だよなっ

先ほどの話の途中で思いついたアイデアだけど、これがうまくいけばきっと省吾さんも探しやすくなるはず。

そう信じてカリカリと作業を続け…

まもなくラジオは完成した。

「おー、できたできたー あとはこれを言えばいいよね」

私は息を吸い込むと願いと想いをいっぱいいっぱい込めてその言葉を紡ぐ。

『お願い、お兄ちゃんたち。私の声を聞いて。そして答えて！』

その瞬間ラジオの中心に据えた誕生石のリングが輝いた。

アナタハ「コトダマ」ヲシンジマスカー？（後書き）

今回のサブタイトルは怪しいイントネーションで読んでください
笑）

そして次回、いよいよお兄ちゃん・s登場（？）予定です。

怪しい電波を受信しました。(前書き)

いつもより長くなってしまいました。でも分ける内容でもないの
このままで…。

よづやく登場のお兄ちゃん・sもいます。

怪しい電波を受信しました。

鉱石ラジオっていうぐらいだから本来は受信専用のキットなんだけど、このファンタジー世界でなおかつうまく使えばルール無用にできそうな『言霊』なんて能力を手に入れたんだから、この際このキットにはがんばって送受信をしてもらおう。

そう考えた私は手作りの鉱石ラジオ改め『チート無線機』君（名前をつけてみた）に向かって話しかける。

「あーあー、てすてす。こちら爽香です。お兄ちゃんたち聞こえますかー？お願いだから聞こえてた返事をしてくださいー！」

とりあえず、届いてほしいと言う願いを込めて言ったので、これで言霊が発動してればあっちでは聞こえるはず。

お兄ちゃんたちの部屋にはオーディオ設備あるから聞こえると思うんだよね。

と、ここまで考えてはたと気づく。

あ、お兄ちゃんたちの声って何で入力したらこっちに届くんだろう？

ぼくぼくぼく………チーン。

どうしよう、そこまで考えてなかった。

思わずがっくりと肩を落としたとき、『チート無線機君』からザザッとノイズが聞こえた。

『さ……か……？……さー……なの……』

「え？……今のって、もしかして…?!」

慌ててチューニングをしてノイズができる限り減るような電波を探
す。

『さーや……？さーやなの…か?!』

『さやつ?!……おまつ、今どこっ……!』

無線機からノイズ交じりとはいえ聞こえてきたのは間違いなく二の
兄ちゃんと三の兄ちゃんの声だった。

「せーちゃん！、こーちゃん！こっちの声、聞こえる?!」

『この馬鹿ッ！どこ行ってるんだ?!みんな心配してるんだぞ?』

『孔明落ち着けッ！さーや、今どこにいるんだ？省吾さんと一緒に
いなくなったからこっちじゃいろいろ大騒ぎになってるぞ?』

一生懸命チューニングした結果ほとんどノイズの混じらなくなった
二人の声に思わず涙が零れる。

「せーちゃん……こーちゃん、ごめんねえ…心配かけて。とりあえ
ず怪我とかはしてないから安心して」

『怪我也病気もしてないんだな？省吾さんはそばにいるのか?』

せーちゃんの背後でこーちゃんがまだ何か言ってるみたいだけど、
感情型のこーちゃんに任せると話が進まないとわかっているせーち

やんが問いかけてくる。

「ううん。省吾さんとははぐれちゃったの。それで今、省吾さんを探して旅をしてるんだ」

『旅？さーや、お前本当にどこにいるんだ？第一なんで電源入ってなかったうちのラジオからさーやの声が聞こえてくるんだ？』

あー、さすが異世界を超える怪電波。法則無視して電源入ってないものから伝えるという荒業がましてくれるんだ…
我ながらチート能力にちよっと引きながらも今までのことをざっと伝える。

いわく、省吾さんと買い物に来ていたところいきなり異世界に召喚されて勇者か巫女姫か職業を選べと強制フラグがたったことや、省吾さんとはぐれてしまい、探すために勇者としてお供を連れて旅をしていることなどだ。

『……………さや、お前なんで一人だけそんな楽しそうなフラグ立ててんだよ』

『一方的に召喚されて揉め事押し付けられたのを楽しそうなフラグなんていえるのはお前だけだと思っぞ？孔明？』

『なんだよ、異世界召喚& amp ;チート能力使いまくりで俺様最強！なんてゲームでしかありえない設定ろ？』

『黙れ、馬鹿。お前、一人で見知らぬ世界に飛ばされた妹の気持ちを考えられればそんなこといえないだろっ！』

『それでも考えて前向きにならなきゃさやだつてやってらんないだろっが！だからオレは明るくしようとなあ！』

「こーちゃん…、せーちゃんも心配してくれてありがとう。二人のいつもどおりの声聞いてたらほっとしたよ」

あまりに変わらない二人のノリにいつの間にか零れた涙は笑い涙に代わっていた。

世界の向こう側でいつもどおりにけんかをしているだろう双子の兄の姿が眼に浮かぶようだ。

いつも冷静沈着で一手どころか三手も四手も先を読んで行動するせーちゃんだから私のさびしい気持ちも全部お見通しのよう。

いつも明るく元気で直観力に優れた行動派のこーちゃんだから沈みがちになる私を笑わせて引き上げてくれる。

こーちゃん・せーちゃん
双子の兄たちただだとある意味漫才みたいな掛け合いがいつまでも終わらないのでいつもならこのあたりで一じょうの兄ちやんかお母さんの突込みがあるんだけどな。

そんなことを思ってたらいきなり双子兄たちの後ろあたりから大きな音が聞こえた。

何事?!と驚いていたらさらに聞こえてきたのは一じょうの兄ちやんとお母さんの声だった。

『爽香っ！無事なのか?!何も嫌な目にあってないか?!』

『爽香、省吾さんと駆け落ちするならするって言ってからいなくなりなさい!みんな無駄に心配するでしょう?!光輝さんが爽香が駆け落ちしたって聞いて仕事全部放り出して帰国するって言うてるのよ!帰ってきたらちゃんと謝りなさいよ?!』

「亮ちゃん、お母さん、心配かけてごめんね。とりあえず、私は元

気だよ？怪我也病気もしてないし。あと、省吾さんとは駆け落ちしたわけじゃないから。いや、できることならしてもいいけど省吾さんが許してくれないって。あと、お父さんもう帰国しちゃった？今仕事忙しいんでしょ？」

『光輝さんにはお母さんが言い聞かせてとりあえず今のプロジェクトが一段落するまで帰ってきちゃダメって言うておいたわ。今やっているプロジェクトには社運がかかっているって言うてたからね。それでも爽香が心配だから最高速で纏めて帰ってくるんじゃないかしら？』

お父さんは海外に単身赴任中なんだけど、お父さんが中心で企画したプロジェクトが大詰めを迎えているみたいだというのは知ってる。責任者のお父さんがいないと進まないからってお正月も泣きながら仕事してたっけなあ。

そんなお父さんが帰ってくるなんて大事だ。

これは一刻も早く省吾さんを見つけて帰らないとまずそつだ。

「ところでお母さん、そつちの世界って私が行方不明になってからどれぐらい経ってるの？」

『うん？爽香が省吾さんと駆け落ちしてから3日ね。しかし残念だわー。16歳で結婚できる年になったから押し倒してでも駆け落ちしたんだと思って八角さんやまとめでたいわねーなんて話してたのに違ったのね』

どうやら詳細はせーちゃんとこーちゃんから聞いたらしいお母さんが頓珍漢なことを言うてくる。

でも、向こうの世界では私がいなくなってからたったの3日しか経っていないらしい。

「せーちゃん、ちょっといい？」

『どうした？』

「そっちの世界だと私がいなくなってから3日しか経ってないのよね？」

『ああ、さーやがいなくなったのが土曜日。月曜の今日は学校に風邪引いて休みだと母さんが伝えてあるはずだ』

さすがせーちゃん、いなくなった間どうやってごまかしたか気になったのをすぐに気づいてくれた。

「あのね、私の時間だところちの世界に来てから既に2ヶ月位経ってるんだけど……」

『ああ、異世界だからな。そういうこともあるんじゃないのか？何にしても早く省吾さんを見つけて帰って来いよ？僕たちでできることがあるなら何でもするから』

「ありがとう。あ、そうそう。今回連絡できたのってせーちゃんが
お父さんが送ってくれた誕生石を使って指輪作ってくれたでしょ？
あの石が媒介になってくれたっぽいの。なのであの石のこともっと
詳しく調べておいてくれないかな？」

『わかった。父さんにも聞いて産地を含めて調べられるだけ調べよ。幸い、指輪に使ったのは父さんが送ってくれた石の一部だから

ね。大部分が残ってるからそつちからも調べてみる』

あれ？お父さんが送ってくれた誕生石って原石だったっけ？
そう考えていると急に無線機にノイズが載ってきた。

『さ……や……、ざっ……きこえ……』

「お兄ちゃんたち？お母さん？！また連絡するっ！必ず連絡するから！」

『わかつ……、かなら……れ……』

途切れ途切れのせーちゃんの声がぶつりと切れたかと思うと媒介に使っていたリングの石の輝きが急速に消えていった。

「はああ……とりあえず、意識的に言葉に意味を込めて言えば言霊として能力がでるっばいけど、とりあえずこの無線機に関しては時間制限もしくは体力制限がありそうだなあ……。すっごい、疲れた」

窓際に無線機を置いたままリングだけ取り外してベッドに転がる。
話していたときは興奮して気にならなかったけど、異常に疲れてしまった。

やっぱり異世界をつなぐって体力が要るんだなあ。

そんなことを考えている間に疲れ果てた私はいつの間にか夢の世界へ引きずり込まれていったのだった。

怪しい電波を受信しました。(後書き)

いつもより長めでしたが会話が多いのでテンポはまあまあだったで
しょうか？

携帯では見づらいかもしれませんね。申し訳ありません。><

流石すぎるよ、おにーちゃん。

休憩日の一日を各自ゆっくり過ごした後、翌日にはアスフェンの王都目指しての旅が再開された。

みんな気分転換が出来たおかげか足取りも結構軽そうだ。

「そういえば昨日わたしたちが部屋に帰ってきたときサヤ寝てましたねー。体調悪かったんですかー？」

「ちがうよー。あまりに天気がよかったから窓際で日向ぼっこしてたらうとうとしちゃってね。そのままだと危ないかなーと思ってベッドに転がったらうっかり爆睡しちゃって」

あははは…と笑ってシーラに誤魔化したけど不自然さは無いかな？

鉱石ラジオ改めチート無線機君のおかげでなんとか元の世界の家族と連絡が取れるようにはなったけど、そのコトはまだみんなには内緒にしてあった。

だってどう説明したら信じてもらえるか、ねえ？

「まったく。誰かさんじゃあるまいし寝てばかりでは困りますからね？」

「おい、バーニー。まさかその誰かさんってのは俺のことじゃないだろうな？」

「おや、お心当たりがおありですか？」

バーニーの突っ込みにぐうの音も出なくなったアレクに皆思わず笑いを零す。

最初の頃はやっぱり王子様とか神官長とか目上の人に対して四角四面の態度をとっていたみんなだけど、最近はようやく柔軟な態度になってきたみたいだなあ。

「まあいいじゃないっすかあバーニー。アレクだって起きてる時はちゃんとあるんすからー」

…一部、碎けすぎてる人もいるっばいけどねー（苦笑）

そんな感じで移動してたのだが、気が付くと大きな湖のほとりにぶつかった。

「あれ？こんなところに湖なんてあったか？」

「おかしいですわね？次の街へ向かうまでには無かったはずなのですが…？」

ヴァレリアとメリッサも首をかしげて懐から地図を取り出しバーニたちとなんだかんだと確認した結果、どうやら街を出発して直ぐに道を間違えたことが判明した。

「困りましたね…。この近くに村などは無いようですし、引き返しても元の街に戻る頃には閉門の時間になっているでしょうし……」

「では仕方ありませんね。今夜はここで野営をするしかないでしょう。まだ日暮れまでは暫く時間がありますし、クレイグと共に安全そうな場所を探してまいります」

「ああ、悪いな。頼んだぞカーティス」

アレクに向かつて一つ頭を下げるとカーティスはクレイグを連れて野営に最適な場所を探しに行ってしまった。

ということは、おお、今夜は旅が始まってはじめての野営なのか！

まあ、考えてみれば今までが毎日小さい村や街であつても宿が取れていたって方が奇跡的なんだよなあ。

情報収集の関係があるからその方が合理的つてのもあるんだけど。

でも普通に考えればフアンタジー世界で旅をする勇者といえは野営が付き物だよな？

ちなみに私は外で寝ることに別に抵抗は無かつたりする。

小さな頃から家族でキャンプとかよく行ってたし、二こーちゃんの兄がある意味サバイバルな野生児だったので山も海も川も遊び場として慣れたものなんです。

湖岸から湖を眺めると水も綺麗だし、魚影とかも見える。

うん、これなら魚釣つて夕飯の一品にしてもいいだろうな！

そんなことを考えてる間にカーティスたちが戻ってきて、この先に少し開けた野営に都合のよさそうな場所があるとのことだったのでみんなでぞろぞろと移動をした。

そんなこんなで夕飯は携帯食料と湖で釣った魚とカーティスが広場を見つける途中でしとめたというウサギ肉という野営にしては豪華なものだった。

もちろんこの近辺に危険な動物が居ないことは既にバーニーたちが調べてあつたが、念のために虫除け動物避けの結界を張ってもらい

その中でみんな固まって寝袋で寝ることになる。

夜が明けたら着た道を戻り、王都へ向かうことになるため食後は早々に寝ることになったのだが、私はみんなが寝静まった頃そっと寝袋を抜け出して少し離れた場所までやってきた。

左右を見渡して誰も何も居ないことを確認すると荷物からチート無線機君を取り出して定位置に指輪をはめ込む。

夕飯を食べてる時にひもを通して胸元に隠しておいた指輪の石が光ったのがわかったからだ。

そして前回と同じように「意志」をこめて呼びかける。

「あーあー、てすてすー。こちら爽香です。どうぞー」

『さーや？聞こえる？こちら晴明。どうぞ』

「せーちゃん？どうしたの？そっちから呼びかけてくれるようになったの」

『ああ。でも詳しい仕組みは略。とりあえずさーやの指輪につけた石の片割れがやっぱり反応するみたいだからこっちでもその石を組み込んだ無線機作った。なんとかつながるもんだね』

「さすがせーちゃん。一日で作っちゃうなんて凄いね！」

『さーやには早く帰ってきてもらいたいしね。というか、こつちでは前回さーやから連絡貰ってから既に一週間たってるぞ？おかげで兄さんとか母さんとかがやきもきしてる』

あれ？また時間がずれてるらしい。これじゃ元の世界に戻ったときに何日経ってるかわからないなあ・・・

『とりあえず学校の方には暫く休むって連絡入れたみたいだぞ。父さんのところに行ってるってことになってるから』

「了解。どつちにしろ早く帰らないとだねー。それでせーちゃんのことだから連絡が付くかどうかだけで試したわけじゃないでしょ？どうかしたの？」

私の問いかけにせーちゃんが苦笑したっぽいのが感じられる。

『電波が通るなら映像も届かないかと思って考えてるんだ。そつちに映像を写せるような仕組みってあるか聞こうと思ってね。それがあればちよつといいこと考えたんだ』

うーん、映像を写すものかー。

この世界の文明って地球で言う18〜19世紀ぐらいなんだよね。馬車とかはあるけど電気もなければ当然自動車とかの工業製品なんてない。

代わりに魔法が発達してるので魔法の使えない一般市民でも呪符などを身につけたマジックツールでそれなりに豊かな生活をしている。

ちなみに空間転移の魔法もあるけど、基本的に膨大な魔力を使うので個人でその魔法を使える人はほとんど居ない。

その代わりに固定魔方阵が各地に設置されていて誰でも一定料金を

払えばそれを使って移動できる仕組みになってるらしい。

多分他の「神」探してる人たちは使ってるのかもしれないけど、私たちは情報を細かく集めたいので使わないことにしている。

「映像ねえ…。それってやっぱり電波受信して接続できないとダメだよねえ？」

『まあそうだね。僕の考えでは最悪映れば何でもいいので鏡とかでもいいと思うけど?』

「何で?」

せーちゃんの意外な言葉に思わず首をかしげる。

『ほら、前回言ってただろ?言霊の力が使えるようになったって。だったら、その力を紙に書いて鏡とかの後ろに張り付いたら対応できるんじゃないかと思ったんだ』

「!!!!!!せーちゃん、それナイスすぎるっ!」

ガサッ

思わず大きな声が出てしまった瞬間背後の草むらが揺れた。完全に油断してた私が驚いて振り返るとそこに居たのは。

「サヤ？……誰と話してるんだ？」

赤く染まった抜き身の剣を下げたアレクの姿がそこにあった。

流石すぎるよ、おにーちゃん。(後書き)

せーちゃん再び登場。でもあまり出しすぎるとアレクたちの影が霞みそうなので出番控えめにしないとですね(苦笑)

急転直下のどんでん返し？（前書き）

今回は少し短いです。そして内容に多少不満があるので後日改稿すると思います・・・orz

急転直下のどんでん返し？

「ア…アレ、ク……？」

いつもの陽気なアレクと違う姿に思わず身が引けてしまっ。

『さーや、どうした？なにかあつ…』

「せーちゃんゴメン！また後で連絡するっ！」

私は慌ててそう言って連絡を切ると無線機から指輪を取り外してポケットにしまった。

「サヤ…？誰と話していたのだ？」

「べ、別に誰とも話してないよっ？！や、ヤダなあアレクったら、寝ぼけてるんじゃないのっ？！」

とっさに誤魔化してしまったものの、よく考えたら別に隠さなくても良かったような気がしたのは後の話。

その場はなんだかやばそうな目をしてこちらを見下ろすアレクの様子が怖くてそこまで考えられなかった。

「そうか…私に言えない相手ということか…」

はっ？何言ってるんだアレク？まさか、本当に寝ぼけてるとかないよね…？

兎に角このままここに居るのはとても危険な気がするので皆のこ

「この非常時に一人でどこに行かれてたんですか?!あれほど結果から出ないでくださいと言った筈です!シーラ!バーニー様に連絡を!」

「はい。任せて」

寝る前の穏やかな雰囲気とは一転した緊迫した雰囲気。

私がちよつと離れてる間に何があったんだろう?

周囲を見渡せばギル君を除いた男性陣の姿がない。

とおもったけど、結界の外ぎりぎりぐらいにバーニーの後姿は見え
た。

「何があったの?」

「魔族の襲撃です」

メリツサの答えに開いた口がふさがらなくなった。

「魔族…ってこの世界にはそんなものもいたの?」

いや、ファンタジーな世界なのは理解してたけど(剣と魔法が主流の世界だからね)まさかそんな人外のものがあるとは思わなかったですよ。

この分だと精霊とか妖精とかまで出てきても驚かなくなりそうですよ?

そんなことを思っているとギル君が悔しげに教えてくれた。

「僕も魔族なんて伝説の中の存在だと思ってましたよ。実際ずっと目撃例などなかったのですから。でも…実際にアレを見たら信じられないですよ」

そう言ったギル君の視線の先、バーニーたちが張った結界の直ぐ外に倒れていたのは黒コゲになって原型をほとんどどめてはいないが明らかに人間とは違うシルエットのモノだった。

「あいつらは正確には魔族とは違う魔獣の一種です。でも魔獣も今までほとんど現れなかったのに何で今になって・・・」

ギル君はそういったけど私は心あたりがある。

もしかしたらあの紅い瞳のヘンタイ神がこいつらを呼んだんじゃないだろうか？

でも、そうしたらあのヘンタイ神は魔王で、そいつに「私の巫女」とか呼ばれた私は魔王神の巫女？！

勇者or巫女姫なんて言われてるばあいじゃないでしょ?!それっ?!

ヘンタイ神とそっくりな姿をした本物王子アレクの姿も見えないし、私は今日一日で何度パニックになったかなーとなんだか遠い目をしてしまった。

とりあえず、魔族や魔獣が姿を消したのは夜が明けるところだった。

急転直下のどんでん返し？（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。

誤字脱字とか、文章で気になる点がありましたら指摘いただけるととても助かります。

それが決めゼリフ？（前書き）

すみません、今回もちよつと短いです。

それが決めゼリフ？

魔物との戦いから一夜明けて。

朝の白い光が寝不足の目にしみた。

最も、それはこの場にいる全員に一致して言えることなただけだね。

なんせ、カーティスとクレイグは一晩中剣を振るって魔物を薙ぎ倒していたし、バーニーはそれでもすり抜けてくる魔物を結界間際で食い止めるためずっと攻撃魔法を使っていた。

シーラとギル君は結界の維持と上空からの奇襲に対する警戒、ヴァレリアは結界内に残った私達の最終ラインだから気を張り詰めていた。

そして私は勝手に寝場所から一人で抜け出して単独行動を取っていたことを光源と敵避けのために燃やしていた火のそばでメリッサにこっそり絞られるハメになったのだった。

朝の光に押されるように魔物の姿が消えてゆき、完全にいなくなっ
てから外で戦っていたカーティスとクレイグが戻ってくる。

隠し切れない疲労が顔に浮かんでいるのでまずは糖分をたっぷり入れた温かいお茶を淹れて配る。

「あれー？バーニー様とアレク様はいつしよじゃなかったんですかー？」

「ああ、お二人なら念のために一周してから戻ってくるってよ。俺たちは先に戻って治療してもらって・・・いてて、メリッサも

「うちよい優しくしてくれよー」

シーラの問いに答えたクレイグだったが後半はメリッサに消毒薬を思いつき塗り塗られて滲みたらしい。

ちなみにカーティスの治療はヴァレリアがしているので私はお茶当番中。

二人とも魔物と戦うのは初めてだっただろうに思ったよりは怪我がひどくなくて安心した。さすが近衛隊の精鋭といふべきなんだろうな、これは。

でもやっぱりそれ以上に気になるのはアレクのことだった。夕べ現れたヘンタイはアレクとどういふ関係なんだろう？

まず考えられることとしては

1. たまたまアレクのそっくりさんだった。
2. アレクが双子だった。
3. アレクは二重人格だった。
4. 神に憑かれているor乗っ取られている。
5. 私の思考を読み取って化けた。

このあたりかなあ。

神様なら5番あたり簡単にできそうだけど、そうだとするとなんでアレクの姿で出てきたんだろう？

セオリーどおりなら私の一番好きな人とか気にかかっている人の姿になって出てくると思うんだけど。

もしそうなら出てくる姿は省吾さんじゃないとおかしいなあ…

ぐるぐる考えながらお変わり分のお湯を沸かしているとようやくバニーとアレクが戻ってきた。

みんなが口々にお疲れ様ですーとか他に以上はありませんでしたか？とか声をかけている中、アレクがまっすぐ私のほうにやってきた。

「あ、アレク。あの、お疲れ様でした。その、夕べは勝手にいなくなっでごめんな……」

パンツ

……………右頬が熱い。

謝罪の言葉の途中でアレクに叩かれたのだと気づいたのは暫くしてからだった。

昨夜メリッサから聞いたところによると私が寢床にいないのに真っ先に気づいたのもアレクでその直後に襲撃があったものだからアレクは相当心配していたらしい。

バーニーとカーティスに野営地の維持を命じるとみんなが止めるのを振り切って私を探しに魔物のいる森に飛び込んでいったとのことだ。

アレクが戻ってきたら真っ先に謝りなさいとメリッサを筆頭に全員に口をすっぱくして言われてしまった。

もちろん話を聞けば聞くほど私の勝手な行動がみんなに心配させたことを実感するしかなかった。

だからアレクが戻ってきたらすぐに謝ることに異はなかった。

けど、まさか叩かれるとは予想外だった…。

「どこに行ってたんだ…！どれだけ探しても見つからなかったから心配したんだぞ！」

え？見つからなかった？

でも、夕ベ三せーちゃんの兄と話してる時にアレクがやってきて…
だけど、アレクは私と会ってないという。

と、言うことは。

やっぱり神 アレクってこと???

「ごめんなさい…どうしても一人になりたかったから……」

それでも怒ってるアレクを真正面から見られずにつつむくと急にぎゅっと抱きしめられた。

「本当に、心配したんだぞ……。何かあってからじゃ困るんだからな」

いきなりのことに私も慌てて抱きしめられた腕の中で顔を上げると、アレクは私の耳にささやくように言葉を続けた。

「トイレに行くんだったらそう言ってから行け。俺が近くで護衛し

「やるから」

それを聞いた瞬間私の鉄拳がアレクの鳩尾にクリーンヒットしたのは言うまでもない。

「デリカシーのない人って、さいっっってい!!!!!!!!!!」

アレクが倒れ、絶叫した私みんながどよめくが、アレクの一言を伝えると誰も同情しなかったのは仕方がないことだと思ふのよね。

それが決めゼリフ？（後書き）

せっかくいいシーンになるかと思いきややはりアレクはアレクだったようです（苦笑）

閑話 アレクの間(前書き)

大変お待たせしました。今回はアレク中心です。

閑話 アレクの闇

昨夜、魔物の襲撃があった。

皆が慌てる中、アレクは真っ先に爽香の姿を探す。だが、いるはずのヴァレリアたちの傍にその姿はなかった。

「なんだこいつら?!いきなりどこから沸いて出やがった?!」

「口より先に手を動かせクレイグ!アレク様!!」

カーティスの怒号にアレクが素早く指示を下す。

「バーニー!結界を!シーラ!ギル!何があっても結界を維持しろ!カーティスとクレイグはヤツラを食い止める!」

「アレク様!サヤがいませんっ!」

メリッサの悲鳴に頷き、アレクは一人別方向に走り出した。

「サヤは俺が探してくる!戻ってくるまで誰一人として欠けるなよ!」

背後でバーニーが呼んでいたが、アレクはその声に振り返ることなく暗い森の中に姿を消した。

「くそっ！サヤのやつこんな非常時にどこにいったんだ？！」

思わず口を付いて出てくるのは悪態だが、その表情に余裕はない。昨日の午後、皆が自由行動をしていたときに爽香は一人宿に残って何かしていたという。

アレクを含めて全員が久しぶりにゆっくりした時間を満喫していたのでその日の夕飯時に爽香の様子が妙に高揚していたことも不審には思わなかった。

そんな中、道を間違え野営することになった今日の夕食時にサヤの様子が変なことに気づいたのは偶然だった。

食後の片付けは男性陣が中心となりさっさと進めていたのだが、ふとアレクが顔を上げると傍にいた爽香が胸元に何かを隠すところだったのだ。

その時は何も思わなかったのだが、アレクに何かを見られたと感じた爽香がそそくさとその場を離れるのが妙に癪に障った。

『あいつ、何を隠してるんだ？まさか、シヨーゴとかいうやつの手がかりでも見つけたのか？』

元の世界で爽香の恋人だったというシヨーゴ。

爽香を召喚よんだした時、一緒にこっちに来たのではないか。

シヨーゴのことを話す爽香は本当に嬉しそうで、そいつのことが本当に好きでたまらないという気持ちが溢れている。

その姿を見るたびにアレクは心の奥が疼くのを感じて仕方がなかった。

自分の第一王位継承者という立場。
姉妹のほかに年の離れた弟も一人いる。

いつ帰れるかわからない今回の旅に足かせの多い立場でも参加できたのは弟のおかげでもある。

『俺に万が一のことがあってもネットおとこがいるから、国は、王家は問題ないものな』

爽香を探す森の中には野営地を襲ったのと同じような魔物が複数いた。
襲ってくる魔物を切り上げ、なぎ払い、突き倒しながらアレクは更に進む。

今年5歳になる第二王位継承権を持つ弟のエドウィン。
常に兄に憧れ慕ってくる誰からも愛される少年。
他国に嫁いだ姉妹たちも、両親も、家臣たちからも可愛がられている。

無論アレクが愛されていなかったわけではない。
それでも幼い頃からこの国エフエノリアを継ぐ者として周囲から一線を引かれていたという気持ちは消えるものではなかった。

望めば何でも手に入っただろう。

だが、常に「国は国王のものではない。国王たるものは国のために在れ」と教えられ育てられたが故にむやみに何かを望むことは出来なかった。

必要なものは全て周囲にあった。

家族も、友人も、教師達も。

だが、それは全て「次期エフェノリア国王」の為に用意だてられたもの。

アレクが心を許していられるのは乳兄弟のバーニーたち兄弟だけだった。

しかし、それさえも与えられたものといえないだろうか？

『何でも持っているか……俺は、俺だけのものなんて持ってなかったんだ』

森を進むほどに魔物の数が増える。

手に持つ剣は数多の魔物の命を散らしたため鮮血に染まり、アレクの服も返り血で黒く染まりつつあった。

一匹魔物を屠るたびに目の前の闇が深くなっていく気がする。

既にアレクは自分がどこを目指して進んでいるのかすらわからなくなっていた。

『俺は、俺だけのものが欲しかったんだ………』

『与えられたものではない、望んだのは俺を見てくれる存在』

『ヒトリハ イヤダ』

『王子ではなく、アレックスを欲してくれるもの』
肩書き 俺

『サビシイ クライ』

『アイツは最初から肩書きなんて気にしてなかった。俺が誰である
サヤうと気にしなかった。……そんなやつは初めてだった』

『アタタカナ ヒカリ?』

『だから気になった。気が付けばあの黒髪も、瞳も、その肌も。全
てが惹きつけてやまなくなつた』

『ホシイ ホシイ ホシイ』

『サヤが別のヤツに気持ちを向けていても俺にその気持ちを換えさせればいい。俺は、サヤが欲しい。……邪魔をするやつは排除して
でも』

『ミツケタ ミツケタ ワレノ……!』

『『サヤは俺の(ワレノ)ものだ』』

ガサリ

低木の茂みの向こうから声が聞こえた。

「「サヤ?……………誰と話しているんだ?」」

自分ではない誰かに向かって爽香がうれしそうに話している。そのことがアレクの心をどす黒く塗り替えていく。心が黒く塗りつぶされたとき、アレクの意識が途切れた。

次にアレクが気づいたとき、既に周囲は明るくなりつつあった。周囲には魔物の気配も爽香の気配もなかった。

「っ……………いつてえ……………?」

倒れ伏していたことに疑問を覚えつつも立ち上がろうとしたアレクだったが、鳩尾に鈍く残る痛みに思わずまた座り込んでしまった。

「いったい、何があつたんだ?」

目の前の立ち木には何故か自分の剣が刺さっている。

「えーと、確か魔物の襲撃があつて、俺はサヤを捜しに森に入つて……………なんだ?何かあつた気がするが思い出せん…。なんで俺の剣が木に刺さってるんだ?」

いくら考えても思い出せない。

とりあえず剣を抜くと付いた血糊を拭ってから鞆にしまっ。

「アレクー！無事ですかっ?!」

「ここだ！バーニー」

がさがさと低木を掻き分けながら近づいてくるバーニーに声を上げて自分の位置を知らせる。

「無事ですか?!」

「ああ。俺は問題ない。皆はどうした?」

「全員無事です。サヤも戻ってきています」

「そうか…。見つからなかったから心配していたんだが。とりあえず戻るぞ」

バーニーと共に戻る途中でカーティスとクレイグに会う。

二人とも慣れない魔物相手に苦労したらしくいくつもの傷を負っていた。

「アレク様、バーニー様ご無事でしたか」

「ああ、大丈夫だ。俺たちは念のためこの周囲を一周してから戻るかからお前たちは先に戻って傷の手当てをしてもらえ」

「わかりました。申し訳ありませんがよろしくお願いいたします」
普段なら見回りなど自分たちでやるといつて引かないカーティスがおとなしく引いたところを見るとこちらの戦闘はかなり激しかったようだ。

「バーニー、このあたりに魔物が出るなんて聞いたことあったか？」

「いいえ。初耳です。そもそもこの大陸自体に魔物の数はあまり多くありませんね。先日の盗賊の件といい今回の襲撃といい何か不穏なものを感じますね」

「……………原因に何か思い当たるものは？」

「いえ…。ただ圧倒的な力の残滓を感じます。われわれとは桁違いの力なのはわかりますがそれ以上のことは…」

「それは魔物の力ということか？」

「違いますね。こんな純粋な力をやつらは持ちません」

きつぱりと言い切ったバーニーにアレクは片手を顎に当ててしばし考え込む。

盗賊の腹から生えた謎の腕。

いるはずのない場所に突如現れた魔物の群れ。
桁違いの力を持った謎の存在。

どれもこれも今までの常識とは大きくかけ離れている。

「それよりもそっちはどうしたんですか？」

「どうしたとは？」

唐突なバーニーの言葉にアレクが思考を切り替えて聞きなます。

「サヤのことです。探しにいくと行って勝手に飛び出しておきながらサヤは一人で戻ってきましたよ？何があつたんです？」

「何もない。というか、森の中で俺が会ったのは魔物だけだ。サヤには会ってない。……全くあいつにも困ったもんだ。一人で勝手に離れるなんて何かあつたらどうする気なんだ」

ぶつぶつと文句を言うアレクに対してバーニーが「それを言える立場ですか」と呆れたようにつぶやいた。

日が完全に地平から離れた頃漸く周囲の安全を確認し終わり、アレクとバーニーは爽香たちがいる野营地へと戻ってきた。

カーティスとクレイグはヴァレリア・メリッサから治療を受けており、爽香は火のそばでお茶を入れているようだった。

「おかえりなさい。まだ何かいそうでしたか？」

「いえ、もう魔物の姿はありませんでした。とりあえず一難は去ったというところでしょうね」

クレイグの問いにバーニーが答えるのを聞きながらアレクはまっすぐ爽香に近づく。

爽香の姿を目にした途端アレクの中で何かもやもやしたものがムクリと頭を上げた。

「あ、アレク。あの、お疲れ様でした。その、夕べは勝手にいなくなっでごめんな……」

パンッ

乾いた音が響く。

誰もが一瞬息を呑んで叩いたアレクと叩かれた爽香の姿を見つめる。

「どこに行ってたんだ……！どれだけ探しても見……つ……から……な……かつ……た……から……心配したんだぞ……！」

『ミツケタ ミツケタ』

「ごめんなさい……どうしても一人になりたかったから……」

うつむいて小さな声で釈明する爽香の姿にアレクは心が痛くなる。こんな風におびえさせるつもりではなかったのに。

アレクは爽香をぎゅっと抱きしめると安心させるように優しくささ

やく。

「本当に、心配したんだぞ……。何かあってからじゃ困るんだからな」

『ソウ ワレノ 巫女。 オマエニ ナニカ アツテハ コマル』

「トイレに行くんだったらそう言うてから行け。俺が近くで護衛してやるから」

アレクのデリカシーのかけらもない発言を聞かされた爽香の鉄拳が炸裂したのは次の瞬間のことだった。

「デリカシーのない人って、さいっつっつてい!!!!!!!!!!」

乙女の秘密に付き合うなんて！と最低男呼ばわりされたアレクの意識は再び闇へと沈んだ。

『イセイガ ヨイナ ワガ 巫女ヨ』

『イマハ オマエヲ マモロウ』

『ダガ トキガ ミツル トキ』

『オマエハワガモトへ』

『ケツシテニガシハセヌ』

閑話 アレクの間（後書き）

ネットはエドウィンの愛称のひとつです。ちなみに他の家族はエディと呼ぶためネットと呼ぶのは家族ではアレクだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182q/>

勇者or巫女姫...？どっちも嫌です。

2011年3月7日11時36分発行